SAO/Black Rounds

NT@K

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＳＡＯ×Ｆａｔｅ

―これはＳＡＯでもなくて、

Ｆａｔｅでもない―

～注意文しかないあらすじ～

５話完結。

続きを書く予定はございません。

Ｆａｔｅの英霊達をＳＡＯの世界に混入させる話。

ただし、英霊達は人間として現実世界に転生している超設定です。

型月世界の人生とは違う道程で生きているので彼らの性格に似せた半オリキャラ状態です。

原作時系列に登場しないキャラも存在します。

ご了承ください。

※Ｈ２８．１２．１４　タイトル「ＳＡＯ：Ｂｌａｃｋ　Ｒｏｕｎｄｓ」⇒「ＳＡＯ／Ｂｌａｃｋ　Ｒｏｕｎｄｓ」に変更。（申し訳程度のＦａｔｅ要素）

Ｈ２９．２．８　（没）Ｒｅ：Ｓｉｓｔｅｒ編を今週末２／１２（日）０時にに削除予定。（原作との乖離が酷い為）

Ｈ２９．２．１３　Ｒｅ：Ｓｉｓｔｅｒ編の削除完了。

Ｈ２９．３．１４　幕間３を文章が物足りなかったので大幅な加筆修正を実施。

目次

『チュートリアル』編

第一話「剣の世界」――1
第二話「デスゲームの開幕」――10
第三話「ボス攻略会議」――17
第四話「嵐の前の一時」――26
第五話「ビーター」――34
後書き的な何か――46
幕間1「決戦前夜」――49
幕間2「SAO／Black Rounds ―ZERO―」――55
幕間3「if／最古の神話へ」（没ネタ）――60

『チュートリアル』編

第一話「剣の世界」

「――リンクスタート！」

その声と共に世界から暗闇に包まれた。

すべての感覚が遮断され、ただ自分の思考だけがある。視覚が失われ、身体を動かしたという感覚もなく、自分の頭から下に身体が付いているのか、本当に自分はそれを見ようとしているのかも分からない。

だが、その暗闇も一瞬、周囲が光に包まれ、思わず目を瞑った。

目を瞑っている感覚、自分が地面に立っている感覚、身体を通り抜ける風の感覚に、はっと目を開く。

「ここは……」

自分の声ではない声が自分の喉から出ている事に驚き、喉を抑える。高めの、それでいて重みのある男性の声だ。違うのは声だけではない。喉を抑えた手はゴツゴツとした手で元の華奢な指や甲とは違う。後は視界にも違和感を感じる。身長としては１７０～１８０㎝といった所か、元の小柄な自分がいつも見ている景色ではない。

「どうやら着いたようですね」

まるでファンタジー世界のような、いやファンタジー世界そのものといったその世界。現実と乖離した脳の中にしかない虚構の風景。ヴァーチャル・ゲーム「ソードアート・オンライン」――通称「ＳＡＯ」の舞台、浮遊城アインクラッドだ。

ＳＡＯは数あるＭＭＯＲＰＧ、いわゆる、大規模多人数同時参加型と呼ばれるオンラインＲＰＧの１つで、家庭用ＶＲマシン「ナーヴギア」でプレイできる、世界初のフルダイブ型のヴァーチャルＭＭＯである。テレビの画面を見ながらコントローラーを持って遊ぶテレビゲームではなく、ナーヴギアというヘルメット型の機械を通して、人間の脳の中でのゲームを可能にする。つまりは、剣で戦ったり、魔法を使ったりといった非現実的なものを、自分の身体を動かす感覚で遊

べるのである。まさに、「ゲームや物語の中に入る」という誰しもが夢見る絵空事を疑似体験できるというわけだ。
「ふむ。とりあえず少し歩いてみますか。っと」
現実の背格好と違うため、1歩踏み出そうとしたら違和感に転びそうになった。とりあえず慣れのために足を2歩3歩と足踏みしてみて、何とか感覚を掴んだ所でゆっくり歩きだした。
彼の居た場所は町のようだった。中世のヨーロッパのような街並み、現代的なビル群や機械もない風景に自然と心躍る。彼はこのような街並みが好きだった。きょろきょろと物見遊山の外国人のように見回しながら歩く。
暫く歩いて店、おそらく武具屋の前に置いてある姿見を見つけた。これで買った武具などを装備した姿を確認するのだろう。彼はおもむろにその前に立ち、自分の姿を確認する。清潔な金色の短髪に、柔らかな双眸に整った顔立ち。すらっとした背格好で、痩せ細っているわけではないアスリートのような体格の男性が立っていた。外国の好青年といった風貌だ。
このようなキャラクターエディットはゲームを開始する時に設定できるのだが、この世界観にぴったりな中世の英国騎士をイメージして彼が作ったものだ。
ふと、自分の左手を振り、システムアイコンを呼び出す。そこに表示された自分の情報を見て、満足する。
《Ａｒｔｏｒｉｕｓ：Ｍａｌｅ》
プレイヤー名「アルトリウス」。少し中学二年生の思考っぽいが、英雄アーサー王のモチーフとなったルキウス・アルトリウス・カストゥスの名前を拝借させてもらった名前だ。現実の名前が似ているのもあって、彼――アルトリウスはアーサー王伝説を愛読している。キャラの風貌を英国騎士風にしたのもそこからだ。
前後ろと確認しながら、心なしか作った時よりもカッコよく見えた。作った外側〝キャラクター〟に自分という中身〝魂〟が入った影響かもしれない。なるほど。確かに街を行き交う自分と同じ大勢のプレイヤー達も、ゲームキャラクターのような能面ではなく、やは

り生き生きとしていて人間らしい。ゲームの中という事で身構えていた所もあったが、こう見ると非現実的な風貌の人間や街並みだが、やはり自分の脳内にある現実なのだと再認識する。
「さて、行きますか」
　数分、姿見で自分の姿を確認して満足したアルトリウスは、そろそろこのゲームの本題である戦闘を試してみるか、と歩き出した。
　とはいえ、アルトリウスは実の所この手のＭＭＯＲＰＧどころか、ネットゲームやＲＰＧゲーム自体が初めてだ。どこに行けば、何をどうすれば戦闘が出来るのかが分からない。さて、どうしたものかと思案しながら歩いていると、不意に黒髪の青年が目の前を走ってきた。
　アルトリウスは反射的にそれを交わし、黒髪の青年も器用な足さばきで交わして、私の身体を通り抜けた。
「っと、ごめん！」
　ぶつかりそうになった青年は両手を合わせて、軽く謝ってくる。
　急いでいたのだろう。そのまま振り向こうとしていたので、アルトリウスはむっとしてその肩を掴んだ。
　捕まった青年は思わず「うわっ」と声を上げ、立ち止まる。
「すみません。ただ、このような人混みで走るなど、自分からぶつかりに行っている行為と同義でしょう。もう少し気を配って頂きたい」
「あ、本当にごめんなさい……っ」
　少しきつめに指摘したアルトリウスだったが、青ざめた顔でそう言って礼をしてきた青年を見て、ばつが悪くなる。自分もきつめに言った手前、これ以上引っ張っても意味がないと思い、肩から手を放した。
「いえ。分かって頂ければいいのですが、何か急いでいたようですね」
「え、ええ。ちょっと……」
　言い淀む黒髪の青年を見て、なんとなく人とのコミュニケーションが苦手そうな印象をアルトリウスは持った。
　とはいえ、先ほどのぶつかりそうになった時の足さばきや自分のように右も左も分からないのではなく、目的地を持って走っていたこの青年に色々聞いてみるのがいいのではないか。ネットゲームとはそ

ういう見知らぬ人とのコミュニケーションも醍醐味だと、このゲームを勧めてくれた者も言っていた。
「随分と迷いのない挙動でしたが、失礼で申し訳ないのですが、私に色々とこのゲームの事を教えて頂けないでしょうか？」
「……初心者さん、ですか？」
先ほどの件の申し訳なさからかおずおずと尋ねてくる。
アルトリウスはそれに頷き、
「……はい。恥ずかしながらネットゲームやＲＰＧといったものに触れた事がありませんでした。なので、どうしたものかと途方に暮れていたのですよ」
「それはまた、どうしてこのゲームを――あ、すいません」
「？　どうして謝るのです？」
「い、いえ。ネットゲームじゃ現実の事を聞いたり答えたりするのはあまり良くないんですよ」
なるほど、とアルトリウスは頷く。
それもゲームを勧めてくれた人物が言っていた。架空の世界とはいえ、この世界の外側にはそれぞれの現実があり、生活がある。現実の情報を見ず知らずの人に晒すのは、デメリットしか生まないのだ。
「それより、このゲームの事を教える、でしたっけ。まあ、さっきぶつかりそうになった件の謝罪も兼ねて、俺は構いませんよ」
「ありがとうございます。助かります」
アルトリウスが礼儀よく９０度近いお辞儀をすると、目の前の黒髪の青年は慌てて「い、いや！いいですよ！」と止められた。
謙虚な性格なのだろう。青年は居心地が悪そうに視線を動かしている。
私はそんな青年に手を差し伸べる。
「私はアルトリウスと言います」
黒髪の青年は、少しだけ逡巡したが、しっかりと手を握った。
「あ、ああ。俺はキリトです。よろしく」
「はい。宜しくお願いします。キリト」
自分から差し出したが、何とも気恥ずかしい光景だった。握手した

２人とも、同じ気持ちだったのか、手を放して共に苦笑する。
と、そこへ。
「話は聞かせてもらったぜ」
唐突に２人の間に赤いバンダナを付けた男性が現れた。キャラクターの風貌だけで言えば２０代くらいの男性だ。あご髭も相まってか、年齢が学生というわけではなさそうだ。
黒髪の青年はきょとんとしているので、アルトリウスが前に出る。
「何かご用ですか？」
「おう。っっても、用があるのはそこの兄ちゃんで、要件はあんたと似たような内容さ。俺に序盤のコツをレクチャーしてほしいんだ！」

＊＊＊

戦闘――このゲーム「ソードアート・オンライン」の戦闘システムは、アルトリウスはじっくり説明書を読んでゲームを開始したのだが、主な特徴は２つ。１つは弓や魔法といった遠距離攻撃武器はなく、あくまで剣や槍などの近接武器で戦う事、そしてもう１つはソードスキルという存在だ。
ソードスキルはいわゆる必殺技で、魔法のないこの世界でモンスターに大きなダメージを与えるこの技術は、ＳＡＯをプレイする上では必須だ。ソードスキルは武器それぞれに固有のものを持つ。更に、攻撃スキル以外のスキルも充実しているため、武器選びとスキル選択は今後のビルドに係る重要なファクターだ。
「――っはあ！」
アルトリウスは呵声と共に剣を振りぬく。
彼らはモンスターの居る戦闘フィールドに繰り出していた。
目の前に居るのはフレンジーボア。キリトいわく、スライム相当（無論、アルトリウスはスライムの存在を知らなかった）のイノシシの小型モンスターだ。
自らの握った直剣がフレンジーボアを縦に薙ぎ、その上にあるＨＰゲージを削る。
ちなみに今の攻撃は件のソードスキルではない。ただの遠心力の

乗った降り下ろしだ。
「ふむ。ソードスキルとは難しいですね」
「ははは。確かにソードスキルにはなりませんでしたけど、すごい剣捌きですね。本当に初心者なんですよね？」
「む。キリトは私が嘘をついているとでも言いたいのですか？　それは心外です」
「いやいやいや。それくらい戦い慣れているってことですよ！」
キリトは慌てて、むっとしたアルトリウスに弁明した。アルトリウスは「それならいいのですが」と言って、再びフレンジーボアに向き直る。
剣を構える、その清澄な姿に何度見ても息を呑む。まるで剣と共に生きていたような自然な構えだ。彼の言では、現実でも剣術を幼い頃から習っているようで、そのおかげだろう。ただ現実にはない必殺技という概念、ソードスキルを出すには手こずっている。
と、アルトリウスの直剣にライトエフェクトが奔った。
「今だ！振りぬけ！」
「っせあ！」
キリトの掛け声と共にアルトリウスはフレンジーボアの眼前に踏み込み、光を放つ剣を斜めに振り払った。両手剣ソードスキル《アバランシュ》。薙ぎ飛ばされたフレンジーボアはそのＨＰゲージを大きく削られ、光の硝子となって消滅した。
「やりましたね。今のがソードスキルです」
キリトがかけ寄ると、アルトリウスは自分の握った直剣を見て渋い顔をしていた。
先ほどまで態度に出ないまでも、ソードスキルが出ずに悔しそうにしていたのでもっと嬉しがってもいいはずである。
「……システムが勝手にやってくれるとキリトは言いましたが、まるで自分の身体を勝手に動かされている感覚で慣れないですね」
「自分はあんまり感じませんけど、アルトリウスさんは元々剣の型を持っているからかもしれませんね」
確かに現実の感覚がリアルにフィードバックされるこのＳＡＯで、

元々剣術をしていたアルトリウスは自分の戦闘の型を持っているが、ソードスキルは自分じゃない別の誰かが作った戦闘の型である。通常の人間は、現実世界では人や何かと肉弾で戦う事がないため、自分の型など持っていないためシステムアシストという誰かの戦闘の型を使う事に抵抗はないが、アルトリウスの場合、自分の戦闘の型と他人の戦闘の型は全く別物のため、恐らくその感覚の違いに違和感を覚えているのだろう。
「確かに。とはいえ、これをマスターしない事にはボスとも満足に戦えないのでしょう？　出来るだけ使って自分の型に落とし込んでいきます」
「そうですね。でも、やっぱりすごい戦闘技術ですね。そこらの経験者よりずっと強いと思いますよ」
「い、いえ。それ程では……」
アルトリウスは照れて手を振る。
そんなアルトリウスにキリトは顔を逸らして、別の人物を遠くを見る目で見る。
「まあ、実際ＭＭＯ経験者の方が手こずってるわけですけども」
「ぐあああああっ」
叫び声をあげたのは先ほど街で話しかけてきた赤いバンダナの青年、名前はクラインといった。別のフレンジーボアの突進を腹に受けて大げさなモーションで右左と転がり痛がっている。
キリトはそれを見て嘆息して、今度はクラインに歩み寄っていく。
「いてええええええ！」
「……いや、痛覚は遮断されてるだろ」
キリトが冷静にツッコむと、クラインはあっけらかんと「あ、そうだった」と気づいて、何事もなかったかのように立ち上がる。
ナーヴギアによるペインアブソーバーにより、痛覚がないこの世界でのダメージはＨＰ減少と、ダメージを受けた部位の不快感という形で表れる。それ故、相手のモンスターのダメージを無視しながら戦う事が出来るというわけだ。
「初動のモーション……、モーション……」

フレンジーボアがまたクラインに目がけて突進する。
それに対して、クラインは握った曲刀（シミター）を肩に預けた構えを取る。瞬間、橙黄色のライトエフェクトが奔る。曲刀ソードスキル突進技《リーパー》。クラインが手前に踏み込んで、一気にフレンジーボアを突き抜ける。
フレンジーボアはその身に水平一直線のダメージエフェクトを刻み、消滅した。
「よっしゃあ!!」
「ナイス。やるじゃないか」
キリトが手を挙げ、クラインが合わせた。
クラインはソードスキルを発動出来て満足げなようで、色々なモーションを試し始める。まるで新しい事を覚えたての子供のようだ、とキリトは笑う。
「おめでとうございます。クラインも出来たようですね」
「おうよ。アルトリウスもソードスキルのやり方掴んだのか？」
「はい。とはいえ、まだ慣れませんが。モーション次第では自分の剣技から繋げられそうです」
そう言ってアルトリウスは剣を構え、円舞のように剣を何度か振るい、切込み、切り上げ、ライトエフェクトで溜めて《アバランシュ》を繰り出した。暫くの硬直の後、剣を仕舞い、礼をする。
その姿にキリトとクラインが、「おおー」と拍手をする。
「すげーな。アルトの旦那は」
「アルト？　私の事ですか？」
「いや、アルトリウスじゃ長ぇし言い難いしよ。馴れ馴れしかったか？」
アルトリウスは首を振り、微笑む。
「いえ、言いやすい呼び方で構いません。す、少し呼ばれ慣れない名前で驚きましたが、そういう誰に対しても親和的になれるのは私としても好ましい」
その言葉と微笑に、クラインだけでなく、キリトまでびくっとなる。
同じ男を相手にしているのに、心臓が早くなるような感覚に、２人

してかぶりを振る。自分達にはそっちの気はない。
「さ、さて、そろそろ次の敵を倒しに行こうか！」
「そ、そうだな、キリト！　いい提案だぜ！　さあ行くぜ！」
肩を組んで無駄に元気に前進していく２人。
アルトリウスは首を傾げ、２人の後を追ったのだった。

第二話「デスゲームの開幕」

もう十数体目のフレジーボアが硝子となって霧散した。経験値が入り、テキストが表示されてクラインのレベルアップが伝えられる。
「よっしゃあ！」
暫く、3人でフレンジーボアを倒していたため、全員のレベルは初期の1から2に上がっていた。クラインが最後にレベルアップしたのを確認して、キリトとアルトリウスは剣を仕舞う。
「うし。これで全員のレベルは2だな」
「ああ。結構狩ったな」
「クライン、おめでとうございます」
アルトリウスが2人に拳を差し出し、キリトとクラインがそれに倣って、拳を突き出す。トン、と軽く拳を合わせて互いの健闘を称え合った。妙な気分だ。会って間もないのに、この3人は昔から連れ添った戦友のような不思議な感覚だ。一緒に剣を持って戦うというのはそういう事なのだろう。
「さて、クラインもレベルアップした事だし、一旦切り上げるか」
「おう。そうだな。俺も5時にピザの宅配頼んであるんだよ」
時間は既に夕方時。現実世界の時間とリンクして風景が変わるこの世界でも、夕日が昇り、一度別れるにはいい時間帯となっていた。
「それじゃフレンド登録だけ済ますか」
「そうですね。では、私から」
互いにフレンド登録を交わす3人。これでいつでも相手の位置情報やログイン情報を確認できるし、メッセージを飛ばす事も出来る。
夕食を食べ終わったら、またこのメンバーでまた狩りをしようと約束して、まだ時間に余裕がある2人はピザを頼んでいたクラインを見送ることにした。と、クラインが左手を振り、ログアウトをしようとして、「あれ？」と声を上げる。
「おっかしいな。ログアウトボタンがねーぞ？」
「そんな馬鹿な。ちゃんと探せよ」
言いながら、キリトとアルトリウスもメニューを呼び出してログア

ウトボタンを探す。
「本当だ……」
「……確かに私のメニューにもログアウトボタンがありません。ログインした時は確かにあったはずですが」
「な？　どうっすかな、宅配の人が来ちまうぜ」
　呑気なクラインを余所に、キリトは訝しむ。ＳＡＯにログインして相当遊んでいたはずだが、その間に運営からそのようなバグが発生したことは告げられていない。本来ならサーバーダウンをするなり何なり処置を施すはずだが、それもない。ナーヴギアでプレイしている限り、ログアウトボタン以外では現状自力で現実世界に復帰することは出来ない。そんな日常生活にも支障を来す重大なバグを長時間も放っておくはずがないのだ。
〈ゴーン、ゴーン、ゴーン〉
　急な鐘の音にキリトは思索からはっと戻ってきて、アルトリウスとクラインも何事かと周囲を見回す。鐘の音は自分達が先ほど出会ったアインクラッドの第１層の主街区《はじまりの街》からだ。
　そしてなぜ鐘の音が、と思う間もなく、３人はそれぞれ光に包まれた。
「強制転移？」
　視界の光が消えると、３人は気づけばフィールドから《圏内》であるはじまりの街、その中央広場に立ち尽くしていた。周囲を見回すと、同じように何が起こったのかとざわめくプレイヤー達。規模は見る限り、ＳＡＯの初回ロットの１００００人全員という感じだ。皆一様に突然の強制転移に戸惑い、混乱している。
　そして空は急に赤く染まり、上空にそれは現れた。
「なんだ？」
「運営のイベントか？」
「悪趣味な演出だな」
「何か怖い……」
　プレイヤーが見上げる先には、巨大な赤いフードの存在が現れた。顔は見えず、上空にゆらゆらと浮かんでいる。ただ不気味さだけが分

かる、そんな存在だった。彼は自分をこのゲームの開発者、茅場晶彦本人であると名乗った。そして彼から告げられるデスゲームの開始。このゲームでのキャラクターの死は現実世界での死に直結する事、浮遊城アインクラッドの最上部の第１００層の最終ボスを攻略しない限り現実世界に戻ることは出来ない事、そして現実からの介入は一切不可能で、どんな手段でも第１００層のボスを倒す以外ログアウトする手段がない事が、無慈悲に残酷に告げられた。

「最後に私から君達にプレゼントを用意しておいた。アイテムメニューを開き、それを確認したまえ」

各々はそれを聞き、アイテム一覧を確認する。そこには今まで所持しなかった見慣れないアイテムがあった。「手鏡」と書かれた、それを皆ボタンを押して、そのアイテムを確認する。呼び出されたそれは現実世界でもある何の変哲もない手鏡だ。

が、変化は突然だった。驚くプレイヤー達の気など知らずにキャラクター達が光に包まれる。

「一体何が起こって……」

やっと目が開けられるようになったアルトリウスは、何が変わったのかと辺りを見回す。一緒に立っていたキリトとクラインを探そうとして、彼らと同じ恰好をした２人を見つけた。

「キリト！　クライン！」

「は？　あんた誰だ？」

呼び止めた彼らは別人だった。２人は同じ恰好をしているが、顔や背が先ほどまで一緒に戦っていた２人とは違う。人違いかと思い、謝って２人を探そうとする。

「なんで俺の名前を知って……って、まさか！」

「え、まさかキリトなのですか？」

「そういうアンタは、アルトリウスさん!?」

目の前のキリトらしき人物はアルトリウスからしても明らかに少年だ。女性的な顔立ちで、幼さの残る顔立ちをしている。だが、先ほどまでいたのは背の高い青年だった。容姿が明らかに違う。

「マジか！お前キリトだったのかよ！」
「そういうお前はクラインか!?」
「一体何が起こって――」
アルトリウスは言いかけて、はっとする。
声が先ほどまでの男性のアルトボイスとは似ても似つかない、女性の声が自分から発せられていた。それは現実世界の自分の声だ。しかも目線の高さや身体の軽さが違う事に同時に気付く。
アルトリウスは慌てて手鏡を見て、自分の姿を確認する。
「私だ……」
そこには短髪の青年の顔はなく、金髪の長い髪まとめた少女の姿があった。
「アルトって女だったのかよ！」
「す、すいません。騙していたつもりはなかったのですが……」
周囲を見回しても、どこも同じような状態だった。ファンタジー世界の住人といった顔立ちの人間はそこにはおらず、現実世界でどこにでもいそうな顔立ちの人間ばかりだ。どうやら茅場晶彦の言うプレゼントとはアバターの容姿、体格、身長を現実のものに変えるというものだったらしい
『私の目的は既に達した。この状況こそが私の目的。プレイヤー諸君が第１００層まで攻略出来るよう健闘を祈っている。以上だ』
茅場晶彦を名乗る赤いフードが消え、中央広場が一瞬の静寂ののち、まさに地獄絵図と化した。茅場への罵詈雑言や現実に戻れない絶望の叫び、泣き崩れる者など、阿鼻叫喚の状態だった。
ずっと冷静だったアルトリウスもさすがの事態にそこまで乱れはしなかったものの茫然自失という状態だった。茅場の言っている事が理解できない。否、納得が出来ない。自分の帰りを待つ者達がいる。アルトリウスが帰らなければその者達は？　悲しむ彼らの姿を想像して、悲鳴を抑えられずに口に手をやり、
「――ウスさん！　アルトリウス！」
「――――っ！」
アルトリウスは軽い頬の痛みと共にはっとする。

気づけばキリトが目の前にいた。右手を振り切っており、自分が叩かれたという事が理解できた。
「す、すいません。だけど、このままでずっと居るわけにもいかない」
「……いえ。ありがとうございました」
痛覚は感じないが、アルトリウスは叩かれた頬を擦る。正直あそこで悲鳴を上げていたら、もう立ち直れなかっただろう。一度目を瞑って心臓を落ち着かせ、思考をクリアにしていく。これは大事な剣術の試合の時にも行う精神統一だ。
深呼吸をして、目を開く。
「もう大丈夫です」
「よかった……。クライン、アルトリウスさん、話がある。付いてきてくれ」
キリトはそう言って、混乱するプレイヤーの中を抜けて、中央広場から街の中に走っていく。アルトリウスとクラインもそれに付いていき、裏路地ともいえる建物と建物に挟まれた小さな小道で向き合った。
「2人ともよく聞いてくれ」
キリトは語った。それはＭＭＯＲＰＧの熟練者の言葉だった。ＭＭＯＲＰＧは言ってしまえば経験値というリソースの奪い合いだ。同じ場所、人の多い所に居れば、リソースはすぐに枯渇して次の手が打ちにくくなる。今の状態はまさにそれだ。今、このはじまりの街には全てのプレイヤーが揃っている。この場所のリソースはすぐに枯渇するだろうという事だ。
だからこそキリトは言う。すぐにここを離れて、次の街に移動すべきだと。
「俺はβテストで次の街への安全なルートは熟知している。2人……いや、3人くらいなら危険もなくたどり着けるだろう。だから俺と一緒に来い」
「それは……」
アルトリウスは悩む。中央広場での喧騒を思い出し、その行為は彼らを見殺しにして自分だけ抜け駆けするという事ではないだろうか。

だが、キリトの言った通り、リソースは限られている。誰かを助けても共倒れになるのがオチであろう。
答えに窮しているアルトリウスだったが、クラインが前に出る。
「……悪いなキリト。そのリソースってのは初心者のアルトリウスにくれてやってくれ。俺は残るよ」
「クライン！」
「すまねぇ。俺には一緒にＳＡＯを徹夜で並んでインしているダチがいるんだ。あいつらは、まだ中央広場に居るだろう。俺はそいつらを見捨てるわけにはいかない」
照れくさそうに言うクラインに、キリトは本人以上に悔しそうに唇をかむ。リソースの話をしたのはキリトだ。それが後1人、それ以上の人間が増えてしまっては駄目なのだろう。そんなキリトに、クラインは「気にすんなよ」と声をかける。
「何かあったらメッセージ飛ばすからよ。アルト……アルトリウスさん、キリトの事よろしく頼んます」
「……アルトで構いません。姿は変わりましたが、この身はキリトとクラインと一緒に剣を振った私に相違はないのですから。キリトの事は任されました」
「クライン、ごめん……」
そう言って肩を落として振り返るキリト。
アルトリウスはそれに付いていき、クラインの「キリトー！　アルトー！」という呼び声に向き直る。
「キリトもアルトも思ったより可愛い顔立ちしてんじゃねーか！　キリトはともかく、アルトに恋人っているかーっ!?」
何とも間の抜けた言葉だ。
だが、不思議と心が温まる。こんな只中にあってもクラインはクラインなのだ。
「クライン！　貴方こそその姿の方がその人柄を的確に表している！
だが、犯罪ですよ！」
「そうだぜクライン！　野武士面の方が断然お前らしいよ！」
ははは っ、と笑いあう3人。

そうだ。別れとは言えども自分達はこの世界で生きていくのだ。現実世界の人達とは違って、またすぐに会えるだろう。だからこそ、また会った時に笑い合えるようにしんみりとした別れではなく、笑って別れよう。

そして程なくして、キリトとアルトリウスははじまりの街を去った。

運命の日はこうして幕を閉じた。

――これはゲームであっても、遊びではない。

茅場晶彦がそう語る通り、遊びではなく、ＨＰゲージが０になれば人が死ぬ。

そんな世界に、総勢１００００人のプレイヤーが生きる現実になったのである。

第三話「ボス攻略会議」

―第一層《トールバーナ》―

早朝の街の開けた街道。その時間には決まって多くのプレイヤーが集まっている。それは決まって行われる見世物があるからだ。

「……じゃあ行くぜ」

「ええ。始めましょう」

向かい合う一人は、右手に握った片手剣を後ろに左手を前に突きだした構えを取る黒髪の少年戦士。そしてもう一人は、両手持ちの大剣を正中に構える金髪の少女騎士だ。どちらも幼い顔立ちをしているが、この場にいる誰もが認めるプレイヤースキルを持つ強力な戦士だ。

じりじりと頬を焼かれるような緊張感に、皆息を呑んでいる。

「――っはあ！」

先に動いたのは黒髪の少年だった。

片手剣よりもリーチの長い大剣の間合いを一気に通り越し、超近接戦闘に持ち込もうとする。が、振るわれた直剣は、大盾の如き大剣に防がれていた。

しかし、そこは既に片手剣の間合いだ。黒髪の少年は間合いを離すまいと畳み掛けるように片手剣のコンボを繰り出す。剣を振るうたびに早くなっていくその剣撃は隙を見せた瞬間に食らいつかれる。

それに対して金髪の少女は不動。大剣を巧みに構え、その全てを防御する。一歩、二歩と下がり、横に移動しながら、黒髪の少年の剣撃を捌き切っている。

その膠着状態は長く続くと誰もが思ったが、不動だった金髪の少女が動いた事で状況へ一変した。

「そこっ！」

黒髪の青年の片手剣のコンボの中振るわれた一撃に合わせて、大剣を降り抜いたのだ。その質量差に片手剣を持った黒髪の青年の腕が弾かれ、体勢を崩す。

「――ッづあ！」

腕に迸る鈍重な不快感に襲われながら、黒髪の青年は続いてくる大剣の振り下ろしを、身体を逸らしてギリギリのタイミング避け、連続してくる振り上げに対して剣を構え直して防御する。
だが、その膂力を殺しきる事は出来ず、大きく後方に跳躍して体勢を整えようとする。
「いきます」
その短い宣言通り、大剣を持った少女は少年の着地を待たずに走り抜け、切りかかる。攻守逆転、少年は片手剣でパリィをして凌ぐも、少女の剣技のコンビネーションに後退しながら避けていく。
とはいえ少年もまだ負けてはいない。相手の振り払いを狙い、跳躍して大剣を足場にして後方に大きく宙返りしながら仕切り直す。さすがの距離に、大剣使いでは追いつけまいと思うだろう。
金髪の少女の持つ大剣にライトエフェクトが奔る。瞬間、引き離した距離を一気にゼロにして大剣を振り下ろそうとしていた。両手剣の突進技《アバランシュ》だ。ソードスキルの恩恵はその威力だけでなく、そのモーションによる移動にも現れている。
取った、と本人だけではなく、その周囲も思った。
「――ぜぁあっ」
気づけば後方に跳躍した少年の片手剣にもライトエフェクトが奔っている。光る剣を振るい、着地の軌道を大きく変え、今にも振り下ろそうとする少女目がけて切りかかっていた。
突然の攻撃にソードスキルを使った少女は攻撃を止められない。大剣を振り下ろすより速く、遠心力を持って振るわれた少年の片手剣が少女を切り裂いていた。
少女が膝をつき、少年は受け身をしながら転がり着地する。
一瞬の静寂がその場に流れ、
「ぐっ……、やられました」
少女の一言と共に周りの観客が、うおおおおおっと雄叫びを上げる。拍手や口笛を聞きながら、少女と少年が向かい合う。
「つよし！　これで３１戦１６勝１５敗で俺の勝ち越しだな」
「キリト、それは違う！　何度言わせれば気が済むのです！　１４戦

目と２０戦目はほぼ同時に一撃で引き分けなのですから、私の勝ち越しです！」
「アルトこそ何度言わせれば気が済むんだ！　１４戦目は百歩譲って引き分けでもいいが、２０戦目は完膚なきまでに俺の一撃の方が速かっただろ！」
「意地っ張り！」
「負けず嫌い！」
ぐぬぬぬ、と睨み合い、醜い言い合いになり、周囲の野次馬達が「また始まった」「その調子でもう1戦！」「アルトちゃん、俺と付き合って！」など、もて囃し始める。２人の決闘はこれも含めての見世物なのである。
キリトとアルトリウスがここトールバーナに到着したのは1週間前の事だ。
デスゲームが開始されて1か月、はじまりの街で無理やりナーヴギアを外されて死んだ２０００人に加え、更に２０００人の死亡者が、はじまりの街の黒鉄宮にある１００００人の全プレイヤーの名前が記される《生命の碑》から名前を消していた。
未だに第一層はクリアされておらず、そのボス部屋にたどり着いた者はいないとされていた。
そんな中、全プレイヤーに情報屋を通じて第一層の攻略会議を行う旨が、とあるプレイヤーから通達された。その名はディアベル。名前は聞いたこともないが、自ら指揮を執り、ボス攻略を目指そうとするのだから大した器の持ち主である事は伺えた。
２人もそれを聞いて、トールバーナにたどり着いた。その後、レベル上げとボス部屋捜索のために迷宮区に潜っていたのだが、それまでの旅で日課となっていた決闘紛いの一撃決着の模擬線を早朝に行っていた。
最初の内は早朝の誰もいない時間に行っていたのだが、ある時にとあるプレイヤーに見られた事により、その噂は瞬く間に広まり、早朝のこの模擬線は多くのプレイヤーの見世物と化していた。
「……なんかトンデモナイことになっちまったな」

「ええ、まあ、確かに。とはいえ見られて困る事もありません。寧ろこの剣技を人に見せる事で、プレイヤー達の生存率を上げられるかもしれないと前向きに思えば、そう悪い気分ではありません」
「相変わらず真面目だな」
「キリトが不真面目すぎるだけです」
痛い所を突かれてぐっと唸るキリト。ゲーマーとしての腕前はまだキリトに分があるが、精神面で言えば真面目なアルトリウスが何歳も上のように感じる。見た目だけならキリトと同じ年か少し下くらいのはずだが、その常の敬語も相まってまるで姉と弟のようである。まあ、そんなアルトリウスにも見た目相応の、負けず嫌いな所や結構根に持つ所、食い意地が張っている所など、子供っぽい一面もあるのだが、それらは全てキリトもお互い様である。
キリトはわざとらしく、こほんと咳払いをして話を逸らす。
「しかし、今日がやっとディアベルから通達のあったボス攻略会議だな」
「ええ。一か月で本当に漸くといった所ですね」
頷き合う2人。それもその筈だ。
死んでも生き返るβテストでの安全マージンと、生死が係っているＳＡＯの安全マージンは大きく開きがある。一層をクリアするだけでも並のレベルで向かえば、それこそ死に直結するのだ。準備をし過ぎるに越したことはない。
「さて、行くか」
「ええ。お互い頑張りましょう」
剣を仕舞い、2人は攻略会議が行われる広場に向かった。
＊＊＊
広場に着くと、そこには既に多くのプレイヤー達が集まっていた。演劇の舞台にも似た観客席にそれぞれのグループを作って談笑をしていた。
キリトとアルトリウスは見知った顔を探して、観客席を歩いていく。
その中、先にその見知った顔に声を掛けられた。

「よう、お二人さん。ここ座れよ」
青い髪に長躯の青年。髪は割と長いようで後ろの襟足を括っている。年は高校生くらいだろう。だが、その目に宿した野獣を思わせる鋭い眼光はもはや生粋の戦士の風格を持っている。彼の名はセタンタ。槍使いのプレイヤーで、日課でやっている決闘をしていたら話しかけてきた事で知り合った。ソードスキル抜きの戦闘ではキリトすら圧倒するアルトリウスと対等に渡り合ったプレイヤーである。
その戦闘もあってかこの青年とは言葉を交わす事も多い。
「壮健で何よりですセタンタ。やはり貴方もボス攻略に参加するのですね」
「当たり前だろ。分かってることを聞くんじゃねーよ」
本当に愉しそうに笑うセタンタ。
彼は戦闘狂〝バトルジャンキー〟なのだ。
「相変わらずだな。死ぬのが怖くないのか？」
「そりゃ生き死にも大事さ。だけどよ、そもそも俺はこういう胸が熱くなるような戦いを求めてこのゲームを始めたんだぜ。自分の命も懸かってるって言うんなら、それも一つのスパイスだろ」
これである。
彼の厄介な所はＨＰゲージが無くなったら死ぬという事実をしっかり理解していながら、それをスリルとして戦いに身をやつしていることだ。実際、彼のビルドはこのデスゲームでは考えがたい防御を度外視したＡＧＩ一極型のものだ。普通のプレイヤーならば命が幾つあっても足りないような戦い方である。
「っと、主役が来なさったようだぜ」
セタンタが視線を中央の舞台に目を向ける。
舞台の袖から、水色の髪の盾を背負ったプレイヤーが現れた。
「みんな集まってくれてありがとう！　俺はディアベル！　気持ち的にナイトやってます！」
その一言に、どっと笑う一同。掴みは上々のようだった。
キリトの隣でアルトリウスが「ほう」と興味深そうに彼を見ている。騎士を目指している同士と思ったのだろうが、キリトは何か違うと心

中ツッコミを入れた。
ディアベルは騒ぐ人達が黙るのを待って、一転して重い口調になる。
「さて、ボス攻略としてここにみんなを招いたわけだが、セタンタ！早速、報告してくれ！」
急な呼びかけに隣にいたキリトとアルトリウスが振り向く。
呼ばれた本人は悪戯が見つかった少年のような顔で、へへっと笑い、立ち上がって宣言する。
「俺は今日、迷宮区でボス部屋らしき馬鹿でかい扉を発見したぜ！」
広場に歓声が上がる。
確かにセタンタは敏捷性を持って迷宮区を踏破できる脚を持っており、その上命知らずと状況判断能力の高さを兼ね備えた強者だ。ギリギリまで潜って潜って、潜り続けた結果なのだろう。
キリトとアルトリウスも思わず拍手を送る。
セタンタは満足げに席に座り、再び広場のディアベルに視線をやる。
「第一層のボスを攻略する事はただ階層を上に進める事だけじゃない。はじまりの街に留まっているみんなにこのデスゲームはクリア出来るんだって希望を与える事にも繋がる。第二層に到達できれば、より一層みんなの気持ちがアインクラッド攻略に向くはずだ。だからこそ、ここに集まったみんな！　一緒にこの第一層をクリアして、みんなに俺達の雄姿を見せつけてやろうぜ！」
「「「うおおおおおおおおおおおおお!!」」」
広場に二度目の歓声と拍手が沸く。
この第一層攻略を全プレイヤーのために行うディアベルの姿勢に、キリトとアルトリウスも心からの拍手を送った。
ここに、第一回ボス攻略会議が幕を開けた。
各々、既にパーティーで来ているものも多く、６人組のグループが出来つつあった。
その中、キリトは焦っていた。ずっとアルトリウスと共に旅をして

きたが、その当人のアルトリウスは6人組を作るとなった途端、勧誘の声が殺到していた。
恐らく、この1週間の模擬戦の影響だろう。女性プレイヤー自体、ＳＡＯでは少ない中、アルトリウスは贔屓目に見なくても美少女だ。しかもキリトとは違い、社交家でトールバーナの一週間の間に多くの人とフレンド登録を済ませていた。ちなみにキリトはアルトリウスを含めても１０人居るか居ないかくらいの寂しいフレンドリストとなっている。
アルトリウスまで他に取られるとなると、キリトにグループを作る当てが居なくなる。隣にいたセタンタもディアベルや元々一緒に旅をしていたグループからの誘いを受けていた。
「(……これはまずい)」
焦りながら見回して、自分と同じくぽつんと居るフードで顔を隠したプレイヤーを見つける。
キリトは仲間発見！と、さりげなく高速で移動し、フードのプレイヤーに話しかける。
「お前もあぶれたのか？」
さすがのコミュ障。第一声からこれである。
話しかけたフードの主は不機嫌そうな声で応じる。
「……あぶれてない。みんな、お知り合いで組んでいるみたいだったから遠慮しただけ」
それをあぶれたというのでは？と疑問も残ったが、キリトも同様の状況だった。余計な事は言うまい。
「じゃあ、俺と組まないか？　ボスは一人じゃあ、どうしても攻略できない。今回だけの暫定パーティーって事でどうだ？」
フードのプレイヤーは逡巡して、こくりと頷く。
それを見て、キリトがパーティー申請を送ろうとして、――背後から呼び止められた。
「キリト！　どこに行っていたのですか？」
「アルト!?　お前、声を掛けられてた人達はどうしたんだよ？」
驚くキリトを余所に、アルトリウスは呆れた顔をする。

何を当たり前の事を聞くのかという面持ちである。
「断りました。ずっと一緒に戦ってきたキリトとの方が連携は取りやすいですし、何よりお互いの実力も知らなければ安心して背中も預けられません」
その一言にじーんと来て、キリトは腕で目を隠す。
「……アルトぉ」
「わわっ、何を涙ぐんでいるのですかキリト！　元から私と貴方の２人でここまで来たのではないですか！　別の者と組むわけがないでしょう!?」
慌てるアルトリウスと、感動の余り泣き崩れるキリト。そしてそれを遠巻きに見るフードのプレイヤーは思わず、くすりと笑った。
「？　キリト、そちらの方は？」
アルトリウスはフードのプレイヤーに気付き、声をかける。
目をごしごし拭って、キリトが鼻声で答えた。
「あ、ああ。こちらは今、声を掛けていたソロプレイヤーだ。一緒に組む事になった」
「なるほど。確かに私達２人でも６人には足りないですね。……一番に私に声を掛けなかったのは後で追及するとしますが」
じとっと見るアルトリウスに、キリトは苦笑する。これは後で説教のパターンである。
アルトリウスはキリトを通り過ぎて、フードのプレイヤーに手を差し伸べる。
「自分はアルトリウスと言います。私も仲間に入れて頂けますか？」
「……いいですけど。元々、貴方達コンビに加わるのだから、その表現はおかしいのでは？」
「いえ。キリトが声をかけた所に私が混ざるのですから問題はありません。名前を聞かせて頂けますか？」
柔和な微笑みにフードのプレイヤーが固まり、はっとして顔を隠していたフードを外した。
そこに居たのはアルトリウスと同じく、ＳＡＯでは少ない女性プレイヤーだった。栗色の長いストレートの髪に、整った顔立ちの少女

だ。
「アスナです。よろしくお願いします」
「こちらこそ宜しくお願いします、アスナ」
「あー、俺はキリトだ。よろしく」
お互いに握手をしてパーティー申請を行う3人。
と、話を勧めようとした所で、セタンタが2人の男性プレイヤーを連れてやってきた。
「ちょうどいい人数じゃねーか。おい、色男。俺達も混ぜろや」
「誰が色男だ。嫌味か！」
「女性プレイヤー2人を侍らせて、何言ってやがる」
セタンタは笑いながら、2人のプレイヤーを紹介して、パーティーに加わった。
セタンタを含む、男性3人が女性プレイヤー群がってあれやこれやと聞いている姿を見て、キリトは「このメンバーで大丈夫かな」と心底思ったのであった。

こうして奇妙な組み合わせだが、キリト達も6人組のパーティーを作る事が出来た。
討伐目標は第一層のボス《イルファング・ザ・コボルトロード》。
ＳＡＯ初のボス攻略作戦が、今、始まろうとしていた。

第四話「嵐の前の一時」

ボス攻略会議ののち、広場は急造パーティーの親睦会も兼ねて宴会を開いていた。宴会とは言っても第一層で手に入る安酒や飲み物ばかりだが、やはりデスゲームとは言えどもネットゲームだ。見知らぬ人間との交流はやはり楽しいのか、意外な盛り上がりを見せている。

その一角、今回の攻略のリーダーとなるディアベルの周囲には多くのプレイヤー達が集まっている。ボス攻略に人を集める行動力や彼の人徳が相まって、皆に慕われていた。

そしてその中にはトンガリ頭の関西弁訛りのプレイヤーが居た。

「お、キバオウっったか。あのオッサン。あいつもディアベルと談笑してるぜ」

「……すごい人望だよな。羨ましい限りだよ」

それを見て、一緒に飲んでいたキリトとセタンタは路上に胡坐をかきながら、その光景を眺めていた。

キバオウと名乗るトンガリ頭のプレイヤーは攻略会議である事件を起こしていたため、一躍有名人だ。主に悪い意味で。

＊＊＊

「ワイはキバオウっていうもんや！」

攻略会議の最中、急に飛び出してきたそのプレイヤーはそう名乗った。

短足の背の小さいオッサンだったが、その態度だけは大きいようだった。

「ボスと戦う前に、言わせてもらうで。この中に、このゲームが始まって死んでいった２０００人に詫びを入れなきゃならん奴がおるやろ！」

彼の言い分はこうだった。

βテスターはゲームの開始と同時にはじまりの街からさっさと消え去り、いい狩場やいいクエストを独り占めにした。だから２０００人の初心者プレイヤーは死んだのだと。そしてβテスターへ謝罪と金やアイテムの賠償を求めてきたのだ。

キリトもβテスターだ。しかもキバオウの言う通り、はじまりの街で多くの人間を見捨てて消えたプレイヤーの一人だ。その負い目もあった。キリトはアルトリウスの静止も振り切って立ち上がろうとする。

だが、そこにエギルと名乗った褐色の男が発言した。

「アンタはβテスターは俺達初心者を見捨てていったというが、このガイドブックはアンタも持ってるだろう。道具屋で無料配布されているからな」

エギルが出したガイドブックはここに居る全員が見覚えのあるアイテムだ。そこには序盤の立ち回り方や戦い方のコツなど、初心者でも分かるように、この世界で生き残るための情報が書き記されていた。

「これを作ったのはβテスターだと知っても同じ事が言えるのか？」

「何やと!?」

「情報はあった。だが、それでも２０００人が死んだ。それを踏まえての話し合いが今回の会議だと思ったのだがな」

エギルはそう言ってキバオウを見据える。

長身の明らかに米国の黒人に睨まれては、キバオウも引き下がるしかなかった。

だが、悔し紛れにキバオウは叫ぶ。

「けど、それをやったのは一部のβテスターだけやろ！　初心者を放っぽり出した自分勝手なβテスターどもはまず謝罪入れんかい！」

エギルはそれに「いい加減にしろ！」と掴みかかり、乱闘騒ぎになるかと思ったが、一人の男が立ちあがった。

「あ？　何か俺に文句でもあんのか。キバオウさんよ」

誰もが目を引く青髪の青年セタンタだった。

研ぎ澄まされたナイフのような鋭い目つきでキバオウを睨みながら中央へ足を進めていった。

「なんや、ボス部屋見つけたあんちゃんか。何の用や」

キバオウはその殺気に気付かないのか、気づいていて平然と出来る大物なのか（恐らく、前者だろう）、軽くセタンタを見据える。

「お前が呼んだんじゃねぇか。俺はお前の言う、はじまりの街で初心者を見捨てたβテスターの一人さ」
「なっ!?」
周囲がざわめき出す。
当然である。騒ぎの中心にいるβテスターが糾弾をどこ吹く風で名乗り出たのだから。
「最初に言っておくが、俺は謝る気はないぜ」
「何やと!? ２０００人を見殺しにしておいて罪悪感は微塵もないんか!?」
「その２０００人の話はエギルの旦那との話で終わっただろ。それに、βテスターだろうが初心者だろうが、ＨＰ０になったら死ぬっつう同じリスクを持ってるんだぜ。命係ってんのに初心者を気にしている余裕なんざある訳ねぇだろ」
あんまりな物言いだった。
その堂々たる開き直りっぷりにキバオウはおろか、仲裁をしに来たエギルまで茫然としていた。
「それでもβテスターの俺にケンカ売るって言うんならＨＰ全損覚悟で決闘を挑んで来いよ。相手になってやる。言っとくが、俺は現実で軍人やっててな。殺そうとしてきた人間を殺すくらい訳ねーぞ」
「ぐっ」
歯ぎしりをするキバオウ。
一触即発の空気に、パンッと誰かが手を叩いて全員の視線を釘付けにする。
「そこまでだ。セタンタ、キバオウさん」
ディアベルだった。
彼は２人の間に割って入り、キバオウを見据えた。
「彼の物言いは俺でもドン引きする程悪いが、正論だ。自分の命が係っていて他人を助けるなんてのはその時点で人の在り方じゃない。それにセタンタは口ではこう言っているが、先ほど言った通り、命を懸けてボス部屋を見つけてくれた男だ。βテスターだからと言って差別するのは間違っている」

「……ちっ。分かったわ。アンタの顔に免じてもうこの件については何も言わん。それでええんやろ？」
不承不承と引き下がり、キバオウは背を向ける。
セタンタはそれに不満げに舌打ちをする。
「はっ。それはこっちのセリフだっつーの。顔洗って出直して来い」
「セタンタもそこまでだ。いいな？」
「……ふん」
苛々としたその態度を隠すことなく、セタンタは元の席に戻っていった。
静まり返る広場の中、ディアベルは再び手を叩いて、皆の意識を自分に向ける。
「――さあ、攻略会議を再開しようか」
＊＊＊
セタンタの大立ち回りとディアベルの人徳で、βテスターへの負の感情は一応の収束を見せた。
罪悪感で名乗りを上げようとしていたキリトにとっても、エギルを含める3人には感謝をしてもし切れない。
「しっかし、自業自得とは言え取り巻きの相手とは泣けるぜ」
「そう言うなよ。アイツらを前線に向かわせないのだって重要な役目だぜ」
そう。セタンタが騒動に加わった事で、彼が連れてきていた2人が空気に堪えかねていたのを察して、セタンタ自身が別のグループに行けと言って、メンバーが4人に減ってしまったのだった。2人が本当に申し訳なさそうに謝罪して去って行ってしまったので引き止められなかったとはいえ、本来6人以上のチームを作るはずだったのだ。既に周囲のチームが出来上がってしまっていたので、増員も出来ずにあぶれ組となってしまったのだ。
第一層のボスは、その騒動でも話題に上がったガイドブックの最新版いわく、《イルファング・ザ・コボルトロード》だ。2足歩行をする獣人のようで、斧とバックラーを装備しているという。HPバーは4段で、その最後のHPバーが赤くなると、斧とバックラーを捨てて曲

刀のタルワールに変え、攻撃パターンが変わるらしい。
そして、そのボスには《ルイン・コボルト・センチネル》という取り巻きのモンスターが数体いて、放っておけば乱戦となってしまう。それを本隊に近づけさせず、倒し次第、ボスに向かうのがあぶれ組のキリト達の役目だ。
「まあ、やれと言われりゃやるがな。燃えねーな」
「それについては同感だ」
キリトは話しながら、宴会の一角に目を向ける。そこには同じグループの女子組がいた。
何を話しているのか分からないが、女子同士の話なのだろう。邪魔は出来ない。
ため息をつきながらキリトは、明日の戦闘に思いを馳せ、夜空を見上げるのだった。

「……アルトリウスさんはどうしてこのゲームをしようと思ったんですか？」
先に口火を切ったのはずっと黙っていたアスナの方だった。
本当はずっと黙っているつもりだった。
だが、女子同士で話したいと言って連れ出した当人のアルトリウスはアスナが黙っているのに合わせて、ずっと黙ってぼーっと夜空を見つめていた。
沈黙に耐え切れなくなったのはアスナの方だった。
やっと声を掛けてくれたアスナに、アルトリウスは泰然として視線を相手に向ける。
「そうですね。実はこのＳＡＯというゲームは私の同居人の借り物なのですよ」
「え？　貴女も？」
「アスナもですか？　それは奇遇ですね。私は一度プレイしたらその同居人に返すはずだったのですが、幸か不幸かこんな事態に巻き込まれてしまって。困ったものです」
本当に困ったという風に苦笑するアルトリア。

「不幸、じゃないんですか？」
アスナは自分の境遇と重ねて尋ねる。
が、アルトリウスは柔和な笑みでかぶりを振った。
「現実世界に戻れなくなった事は不幸です。それは否定しません」
だけど、と続ける。
「同居人の彼がこのデスゲームに囚われなかった事は幸運です」
アスナははっとした。
ここまで死に物狂いで戦ってきたアスナは忘れていたが、本当であれば兄がこのデスゲームに囚われ、命を落としていたかもしれないのだ。
「彼の言う『剣1本でどこまでも行ける世界』。私はそれに興味があった。それまで私は剣を振るって生きてきたような人生でした。師である祖父の厳しい修行に耐え、来る日も来る日も剣を振るい続けた。その事に文句も不満もありません。ただ、修行を終えて、日本のとある家庭に住み込むようになって思ったのです。今までの剣の道は閉じた世界だったのだと」
彼女がホームステイで住み込むようになった家庭。そこはとても温かかった。
それまで剣1本で生きていた身にはそれが一番のカルチャーショックだったらしい。最初は勿論、ぬるま湯に浸かっているようで慣れなかったが、次第にその場所が居心地のいい自分の居場所になったのだとアルトリウスは語る。
「だから、剣を振り続けて閉じていった私だったから、剣1本でどこまでも行けるというそんな可能性に心が躍った。同居人の彼は快く貸してくれました。それが始まりというわけです」
「……」
アスナは彼女の語るそれまでの人生を自分の事のように感じていた。
良家の令嬢として生を受け、エリートコースの道を歩んできた。両親の求めるまま生きてきたアスナは、その生活が狭く閉ざされていく世界のように感じていた。自分のやりたい事もなく、他人が描いた

レールの上を走るだけの人生。そこに疑問があったが、それを考える余裕もないくらい、現実は焦燥感に満ちていた。
だからアスナは、同時に憧憬の念を抱いた。
彼女はその生活に不満も文句もないと言った。それは嘘でも虚勢でもないだろう。アスナは自分の生活にそうは思えなかった。そして彼女はそんな中、自分の居場所を手に入れた。温かかったと語る、そんな場所をアスナは持ち合わせていなかった。
「アスナは昔の私のようです」
唐突にアルトリウスはそう言った。
アスナは心の声を聞かれたような気がして、どきっとした。
「私には師との別離という転機がありました。恐らくその現状を打破するには転機が必要なのでしょう」
「……転機」
「そうです。ＳＡＯは幸か不幸か、本来出会うはずもなかった人間と出会う事が出来る。そう悲観することばかりではありません。これが貴女の転機になり得るかは分かりませんが、私のような居場所をここで見つけられるかもしれませんね」
柔和な笑みでそう告げる。それは一つの希望だった。
アスナはそれに対して何かを言おうと言葉を探していると、「むっ」とうなる声が聞こえた。
どうやら何かを食べようとしてアイテムストレージに入っていないことに気付いたようだ。実に悔しそうな面持ちである。先ほどまでの人生相談を優しく乗ってくれていた人物はどこか彼方に消えていた。
アスナは堪え切れずに、「プッ」と笑いを漏らす。それに端を発して、感情の濁流が決壊したかのように笑いが止まらなかった。
「あ、アスナ！　人の不幸を笑う事は好ましくない！　それ以上笑うのをやめて頂きたい！」
「あははっ、だ、だって……ぷくくっ」
「アスナ！　ひどいです！」
怒るアルトリウスに申し訳なく思いつつ、アスナはそれでも笑っ

た。今までの閉塞感や焦燥感を吹き飛ばすように、はしたなく泣きながら笑い転げた。

笑いが収まった頃にはアルトリウスからそれは長い説教が始まり、謝罪として食料を渡すハメになったが、久しぶりにこんなに笑わせてくれたお礼としては、それは安過ぎる買い物だろう。

それぞれの夜が終わり、皆眠りに就く。

明日の晩も、今度は祝杯を上げられるように。

第五話「ビーター」

遂に決戦の朝が来た。
朝になって急に作戦変更の旨が伝えられた。
本来であれば、ボスのコボルドロードのタゲを交互に取りつつ、防御に徹する壁部隊にＡ・Ｂ隊。取り巻き殲滅にＣ・Ｄ隊、高機動高火力でコボルトロードと取り巻きを臨機応変に攻撃するＥ隊。ボス・取り巻き両者の攻撃を阻害する長物装備の支援サポート部隊に、ボス担当のＦ隊に２グループ・取り巻き担当のＧ隊に２グループ。そしてあぶれ組の４人はＦ隊の取りこぼしを潰すというサポートを行う編成だった。
サポート部隊のサポートという時点で、もはやセンチネルの経験値すら貰えるかどうかという酷い閑職だったが、昨夜の親睦会でキリトとアルトリウスの日課であった決闘を見ていた観客達の何人かの進言と、セタンタの斥候としてのボス部屋発見の功績により、Ｃ・Ｄ隊の取りまとめとして正式に組み込まれる事になった。
ずっと不満を言っていたセタンタも「つまりはさっさと俺らでセンチネルを殲滅してボス攻略に挑めるって事だろ」と燃えていた。
キリトも正直、見世物と化していた朝の模擬戦がこのような結果に結びつくとはと驚き、わらしべ長者やバタフライエフェクトに大いに感謝した。
「セタンタの言う通り、センチネルを早急に殲滅出来れば私達もボスに向かうことが出来ます。つまりこれは、センチネルの経験値とボスの経験値の両方を手に入れるチャンスです。皆さんの働きに大いに期待します」
おおっ、と湧き上がるＣ・Ｄ隊。
セタンタの一件もあり、もっと揉める事も予想できだが、グループ編成でも引く手数多だったアルトリウスが陣頭指揮を執る事で、Ｃ・Ｄ隊の士気は急激に上がっていた。彼女自身、人を率いる才能があったのだろう。取り巻きを相手にするだけと落胆していたＣ・Ｄ隊の戦意を、これでもかと引き上げてくれた。

「すごいわね、彼女」
「ああ。一緒に旅をした俺もびっくりだ」
そういうキリトはC・D隊の後ろを再びフードを被ったアスナとともとぼとぼと歩く。
キリトは気になって聞いた。
「なんでアンタはまたフードなんか被ってるんだ」
「……彼女の人気を見たらちょっと顔を出しづらくなっちゃって」
なるほど、とキリトは納得する。
恐らく最初からフードを被っていたのは、珍しい女性プレイヤーだからと言って近づいてくる男連中に嫌気を差しての恰好だったのだろう。言えばアスナは否定するだろうが、アルトリウスと別種の美少女だ。それは人気も出るだろう。
「まあ、いいじゃねーか。その分、俺らがアスナの可愛さを一人占めできるんだからよ」
セタンタがC・D隊から出てきて、アスナに絡む。騒動を起こしたセタンタだったが、その痛快な性格からかC・D隊の面々とも打ち解けていた。
絡むセタンタに、アスナが露骨に嫌そうな顔をする。……いや、顔はフードで見えないが。
「セタンタさん。真面目にやってください」
軟派男に憮然と返すアスナ。
だが、軟派男には暖簾に腕押し、糠に釘。
「おう。ボス部屋に着いたらな」
「今からです！」
また始まったとキリトは遠い目で2人を見る。朝の決闘後のアルトリウスとのやり取りは知らぬ存ぜぬ、棚上げである。
と、程なくしてセタンタが斥候としてマッピングしてくれたボス部屋に漸くたどり着いた。
リーダーのディアベルがボス部屋の前に立ち、振り返る。
「みんな！　最後に俺から言える事は一つだ。勝とうぜ！」
その力強い言葉に皆頷く。

それ以上の言葉は要らない。後はディアベルの言う通り、勝つだけだ。
ディアベルが皆の面持ちに満足して、振り返り、ボス部屋に触れる。すると、扉は一人でに音を立てて開いていく。
王宮の玉座の間、その開けた部屋の奥で暗がりの中、怪しげに光る双眸が見える。
「いくぞ！」
その掛け声とともにぞろぞろと攻略隊が部屋に入っていく。
そして、全員が入った所で部屋の電気がつくように視界が明るくなった。開戦の合図だ。同時に、玉座に座ったカンガルーを獰猛にしたかのような獣人が武器を装備して飛び上がって着地した。《イルファング・ザ・コボルトロード》だ。そしてそれと同時にポップする古プレートをまとった矮躯のモンスター。あれが《ルイン・コボルト・センチネル》だ。手には片手棍が握られており、盾は持っていない。
コボルトロードが咆哮と同時に、センチネル達を引き連れて突っ込んできた。
それに対し、ディアベルも「攻撃開始！」と指示をだし、攻略隊が押し寄せる。
遂に戦いの火ぶたが切って落とされた。

キリト達の役目はセンチネルの殲滅だ。コボルトロードのタゲを取りながら立ち回ってくれるＡ・Ｂ隊と、それを抜けた際のＦ隊の働きで、センチネルを相手取るＣ・Ｄ隊に流れてくる事はない。
目の前のセンチネルが片手棍を振りかぶり、突っ込んでくる。
それに合わせてキリトは袈裟切りのソードスキル《スラント》で、その体躯に似合わぬ重たい攻撃を弾く。
「スイッチ！」
相手の体勢を崩した隙にノックバックを受けて動けないキリトの横をアスナが駆けていく。
この戦いでは陣頭指揮を執るアルトリウスと、フィールドを縦横無地に走り抜け、遊撃するセタンタ、そしてキリトとアスナがコンビを

組んでセンチネルと対峙していた。
細剣のソードスキル《リニアー》、細かい連続突きで相手を捉え、最後の一突きがセンチネルの弱点である首に命中する。
瞬間、センチネルが硝子となって消滅する。
「ナイス！」
アスナが振るうソードスキルは凄まじい剣速だった。システムアシストを超えた剣速と膂力はアルトリウスも凄いが、アスナは迅く正確だ。先ほどからセンチネルの弱点である部分に１００％の命中率を誇っている。……これで２人とも初心者というのだから末恐ろしいものである。
と、流れてきた別のセンチネルの攻撃を弾いて、再びスイッチ。アスナの《リニアー》が再びセンチネルの首を突き崩し、消滅させた。
このスイッチの動きも昨晩一緒の部屋に泊まったアルトリウスに習ったばかりだというのだから驚きである。使用武器も相まってか、まだ敵の攻撃を弾く事は出来ないが、それにしてもとも思う。
「センチネル殲滅を確認！　リポップする前にコボルトロードを叩きます！」
アルトリウスの強い声が響く。
それに続いて、歓声と共にＣ・Ｄ隊がコボルトロードに向かっていく。
と、前線のＥ隊が遂にコボルトロードのＨＰバーの最後の段を赤く染めた。情報通り、コボルトロードは斧とバックラーを投げ捨て、後ろ腰に着けた柄を握る。
「みんな下がれ！　俺が前に出る！」
ディアベルは急に陣形を崩して、コボルトロードに対峙する。セオリーで言えば包囲殲滅だろう。だが、ディアベルはソードスキルの発動体勢を整え、相手の動きに合わせて放とうと、今か今かと待ち構える。
コボルトロードが後ろ腰から柄を引き抜いてその姿が露わになる。
その瞬間、キリトは戦慄した。
曲刀にしては細く、直刀にしては片刃しかないそれは湾刀〝タル

ワール〟ではない。
キリトは喉が潰れんばかりの声で叫んだ。
「そいつは違う！　全力で後ろに跳べ！」
何事かと、疑問に思う間もなく、コボルトロードはさながら居合抜きのように刀にライトエフェクトを迸らせて、跳躍した。
曲刀の対応をしようとしていたディアベルは驚き、身体を硬直させる。それが命取りだった。
コボルトロードは壁や柱を足場に何段も跳躍し、重力に任せて刀を振り下ろした。カタナのソードスキル《旋車》。ディアベルの身体を斜めに切り裂き、その身を宙に飛ばした。そこから更に追撃で、突進からの切り上げのソードスキル《浮舟》により、宙を浮くディアベルを切り飛ばした。
「ディアベル！」
キリトがディアベルに駆け寄る。
ライフボトルを飲ませようとして出した手をディアベルは首を振りながら止めた。
「……罰が当たったんだな。ラストアタックボーナス。お前ならわかるだろ」
「ッ。ディアベル、お前――」
ディアベルはβテスターだった。彼は知っていたのだ。フロアボスのラストアタックにより、レアアイテムが入手出来ることを。だからこそ包囲殲滅のセオリーを無視して、一人で前に出たのだ。
「……頼む、ボスを倒してくれ。みんなの、ために――」
キリトの腕の中、それを伝え、ディアベルは消滅した。先ほど倒したセンチネルのように、光の硝子となって消えていった。
リーダーのディアベルを失った事で攻略隊が士気を失う。そこに容赦なくコボルトロードが斬りかかった。茫然とした彼らは防御の姿勢も出来ずにその攻撃を受け――なかった。
走り込んできた大剣の剣士アルトリウスが、コボルトロードの刀に合わせて剣を真っ向から受け止める。その膂力を殺しきれずに苦悶の表情を浮かべる。

「狼狽えるな――ッ！」
アルトリウスは大剣を支えながら叫んだ。
「Ａ・Ｂ隊は前へ、Ｅ隊は後退！　Ｃ・Ｄ・Ｆ隊はセンチネルのリポップに備えてください！」
指示を出しながら、僅かに力を抜き、その間に刀の振り下ろしを、身体を入れ替える事で交わす。だが、交わしきれずにアルトリウスのＨＰバーが大きく削られる。
だが、アルトリウスは怯まずに次の指示を出す。
「――ッ。セタンタはＣ・Ｄ・Ｆ隊を指揮してください！　そしてキリト！」
「！」
ディアベルにかけ寄り、最期の言葉を聞いていたキリトははっとする。
アルトリウスの強い瞳。そのメッセージを確かに受け取った。
「……頼みます」
「任された！」
Ａ・Ｂ隊を刀の旋回によって吹き飛ばし、再び跳躍するコボルトロード。ディアベルを切り飛ばしたソードスキルだ。見た事のないソードスキルのパターンに攻略隊は対応できない。――だが、キリトなら出来る。彼は知っている。ここより上層の敵が使った武器とそのソードスキルを知っている彼なら。
「届けぇ――ッ！」
片手剣ソードスキル《ソニック・リープ》。上空に向かっての斜め切りを、コボルトロードと上空ですれ違いざまに打ち込む。背中から攻撃を受けたコボルトロードはそのまま攻撃態勢を崩して、地面に激突する。
キリトは着地し、コボルトロードに走り込む。
と、その隣にはフードを被ったアスナが走り込んでいた。
「私は貴方と組まされた。だから最後も――」
「ああ！　手順はセンチネルと同じだ！」

コボルトロードが腰を沈め、居合抜きの構えを取る。瞬間、高速でこちらに飛び込んできた。だが、それはキリトが知っている。それに合わせて、こちらもソードスキルを放ち、相殺する。
「スイッチ！」
走り込むアスナの《リニアー》がコボルトロードの首を狙う。
しかし、それより先にコボルトロードのノックバックが解けた。すぐさま体勢を立て直し、攻撃をしてきた。
あの位置ではアスナは交わしきれない。
そこへ――
「らあっ！」
セタンタの槍のソードスキル《フェイタル・スラスト》による薙ぎ払いでそれを弾いた。
その隙にアスナは止まらずに突きを繰り出す。
「セタンタさん！　センチネルはどうしたんですか!?」
「ああ。C・D・F隊の奴らがこっちは大丈夫だって言うから抜けてきた。そら、次来るぞ！」
セタンタが怒鳴り、コボルトロードの攻撃を受け流す。
キリトはそこに走り込み、《スラスト》をコボルトロードの刀に当て、体勢を崩す。
「一気に行くぞ！」
「ええ！」
「おう！」
アスナの突き、セタンタの薙ぎ払い、キリトの袈裟斬り。コンビネーションによる連撃が、コボルトロードの最後の赤いバーを削っていく。そして最後、セタンタが刀を弾いたタイミングで渾身の一撃を持ってキリトが片手剣を振り抜き、返す振り上げでVの字を描くように切り上げる。片手剣ソードスキル《ヴァーチカル・アーク》。コボルトロードの胴体を両断するかのように振り抜き、遂にコボルトロードが硝子のように霧散した。
暫しの静寂、そして全員の上空にコメントが映し出される。
『Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ!!』

叫びにも似た歓声の中、第一層は遂にクリアされたのだった。

各々が喜びを称え合う中、アルトリウスが歩み寄ってくる。

「アルト！　大丈夫か!?」

「ええ。既に回復は済ませました。問題はありません」

いつも通りのアルトリウスにキリトはほっと胸を撫で下ろした。

と、安堵するも束の間、キリト達の周りに開放隊の皆が駆け寄ってきた。ディアベルを失った解放隊の陣形を立て直したのはアルトリウスだ。更に人気が増したらしく、皆に感謝をされている。

かく言うキリトも《ソニック・リープ》で相手のソードスキルを擦り抜けて斬った事やラストアタックなど、揉みくちゃにされていた。

その中、アルトリウスは僅かな隙間から拳を伸ばす。

キリトは照れ臭そうに、隙間から手を突き出し、コツンと拳を合わせた。

「――なんでや！」

それを打ち破ったのはキバオウの叫びだった。

「なんでディアベルはんを見殺しにしたんや！　自分、敵の使うを知っとったやないか！　なんでそれを先に皆に教えんかったんや！」

「――ッ」

キバオウの言い分は尤もだ。

だが、キリトはβテスト時でもコボルトロードの武器はタルワールと認識していた。仕様が変わっているとは思ってもみなかったのだ。

「自分もβテスターやったんやろ！　だったらボスの戦闘パターンを全部知ってて隠してたんとちゃうんか!?」

「それは……」

答えを窮するキリトに周囲がざわつく。

と、そこにセタンタが前に出た。

「おい。忘れてもらっちゃ困るが、俺もβテスターだ。俺の記憶じゃコボルトロードの戦闘方法はガイドブックに載ってた通りだった。仕様が本サービスで変わっただけだろ」

「それでも、敵の武器の情報や攻撃パターンをガイドブックでも作っ

て、コイツが情報を流してたらディアベルはんは死なんかったやないか！」
「……いい加減にしとけよ、テメェ。そんなに戦争してぇのか。ここに止めるディアベルはいねーぞ」
セタンタが槍を抜き、殺気立つ。
周囲がざわつき、キバオウの決死の覚悟で剣と盾を装備した。
まずい。このままでは本当に殺し合いが起きる。キバオウはともかく、セタンタはやるといったらやる性格だ。そうなったら彼の言う通り、本当に戦争になる。βテスターの立場も今よりずっと悪くなるだろう。
それでは駄目だ。ディアベルは皆のために戦って命を落とした。それが無駄になる。
不意に、目の前に出たラストアタックボーナスのレアアイテム取得のメッセージが目に入る。
「ほう。やる気になったか。そら、βテスターに不満のあるヤツはまとめて掛かってこいよ。俺が――」
「――ハハッ」
殺気立っていたセタンタは急に聞こえてきた笑い声に言葉を止める。
ざわめいていたプレイヤー達も静かになった。
「ハハハハッ、βテスター？　どこの次元で話してるんだよ。あんな素人連中と俺を一緒にしないでくれるか」
「な、なんやと!?」
立ち上がり、セタンタの横を通り過ぎる。ちっと舌打ちが消え、槍を仕舞った。彼は今からキリトがやろうとしている事を察してくれたらしい。喧嘩っ早い癖に、この男はこういう所は鋭いのだ。彼という人間の評価に苦しむ。
「βテスターって呼ばれている１０００人の奴らの殆どはレベリングも知らない素人ばかりだったよ。だが、俺は違う。俺はβテストで当時誰もが昇った事ない階層まで登った。ボスの攻撃パターンを知っていたのはここよりずっと上層のカタナを持った敵と散々戦ったか

らだ。情報屋なんて目じゃないくらい知っているのさ」
それを聞き、皆が一様に「ズルじゃねーか！」や「チートだろそんなの！」と騒ぎ出す。その中で一つ面白いのがあったのでキリトはそれを『忌み名』に使う事にした。
「ベーターでチーター、略してビーターか。面白いな。そうだ、俺は『ビーター』だ！」
キリトはアイテムメニューを開き、先ほど入手したレアアイテム《コート・オブ・ミッドナイト》を装備する。漆黒のコートに身を包んだその姿は、嫌われ者の姿に相応しい。ふっと自嘲の笑みを浮かべ、コートを翻す。
「もうβテスターごときと一緒にしないでくれよ」
嘲笑い、茫然とする解放隊の中を歩いていく。
これでいい。これでβテスターはこれ以上糾弾される事なく、忌避の目は全て自分に向く。自分が嫌われるだけだ。
ただ、それだけの事――。
「キリト！」
アルトリウスが駆け寄る。
彼女はキリトがこんな茶番をした意味を理解しているだろう。
だからこそ、
「来るな！」
キリトは叫んだ。
振り向かずに、彼女の顔を見る事もなく。
「アルト。君は人望も厚い。これからは君が主軸となってボス攻略が進むだろう。お前ならどんな巨大ギルドだって率いてみせる。そんな才能があるんだ。これ以上、俺と関わるべきじゃない」
アルトリウスは彼女が望んだ通り、王の気質を持っている。軍団を率いるカリスマ性、それを指揮しうる統率力、状況判断能力。どれを取ってもこのアインクラッドを攻略するのに必要不可欠な存在だ。
だが、キリトは違う。自分が居なくなった所で何が変わるでもない。
きっと真面目なアルトリウスは怒るだろう。悲しむだろう。

それでもこの道は引き返せない。
「――分かっています」
「え？」
キリトは思わず振り返りそうになり、止める。
「キリトのしたかった事、今からキリトが臨もうとする道。全て分かっています。止める気はありません」
アルトリウスは理解しているのだ。
あれ以外止める方法がなかった事も、これからキリトはソロで行くしかないという事も全部理解して、ここに立っていた。
「私はギルドを作ります。このデスゲームを一刻も早く終わらせるために。ただ、キリト。貴方もそのメンバーです」
「何を言って……」
「この一件のほとぼりが冷めるまでにギルドの形を作っておきます。そして、それが出来た時、また貴方をパーティーに誘います。私にそれまで我慢をさせるのです。その時は嫌とは言わせませんよキリト」
今の彼女の表情は振り返らなくても分かる。
背後に立つ少女は自分が知っているよりもずっと強い。
負けず嫌いで、すぐに根に持つ、美しい剣王だ。自分が何を言おうと、何を思おうと、その強い瞳と剣で、どこまでも自分を遠くまで連れて行ってくれるだろう。
キリトは、それを心から見たいと思った。
「……ああ。待ってる」
思わず、そう呟いていた。
そして、その呟きに彼女はこう返すのだろう。
「――はい。待っていてくださいキリト」

第一層のクリアはその日に全プレイヤーの知る事となった。
はじまりの街で燻っていたプレイヤーや、ボス攻略に間に合わなかったプレイヤー達に希望を灯す。
ディアベルが為そうとした事は叶い、その日から攻略隊の勢力は更に増大していった。

これが本当のスタートだ。
はじまりの街のチュートリアルは終わっていなかったのだ。
――この一層攻略の日こそが、本当のソードアート・オンラインの始まりなのだ。

後書き的な何か

どうも作者のｎｔａｋｕ〃なたく〃です。

この度は『ＳＡＯ・Ｂｌａｃｋ＆Ｓａｂｅｒ（仮）』をご拝読頂きありがとうございます。５話完結で第一層クリアまでの作品、という中途半端なものではございますが、これを読んでいる方は長くなってしまった前文を読んでもなお、読んでくださった奇特な……もとい、猛者たちには感謝の至りでございます。

さて、「後書き的な何か」と章打ちましたが、「こういう小説のあとがきって面白いよね」と思って書き始めたので、あまり何も考えてなかったのですが、さてどうしましょうか。正直な所、自分の事を延々と語る気はあまりないです。折角なので、この機会に先の構想とは言い難い妄想の話でもいたしましょうか。い、いや、彼女が欲しいとか彼女がロリで家事が得意だとか、そんな自分の妄想を垂れ流すわけではございませんよ？　一応はこの作品の妄想というか、設定やキャラクターの事を語って、この場を占めたいと思います。

〈設定〉

Ｆａｔｅからの参入キャラが全員転生しているという妙な設定ですが、これは実はこの作品だけではなく、自分が妄想・構想するＳＳは大体こんな感じですね。あまりトリップとかは書かないです。

後、個人的な転生観ですが、転生というのだから輪廻転生、元といた人物が一度分解され、再構成されるわけですから、正直な所、完全に記憶を引き継いで完全に同じキャラとして書くのではトリップと一緒なのでは？と思ってしまいます。転生して生を受けた赤ん坊が前世（原作アニメ）の記憶を持っていてっていうのはどうしても違和感が残ります。なので、自分が転生物の構想・妄想をする時は、オリ主のように転生したキャラが歩んできた人生をちゃんと考えて、形作るようにしています。まあ、これが半オリキャラ化の原因というか、当然の帰結なんでしょうけど。

なので、原作のキャラに似せてはいますが、「こんなのセイバーじゃ

ない！」と言われても、そりゃ転生しているんだから同じキャラなわけがないとも思います。まあ、それを言い訳にして完全にオリキャラ化するのは避けてはいるつもりです。

どうかご容赦を。

〈キャラクターについて〉

キャラクターについて、と言ってもキャラの設定とかを書く気はあまりありません。

一応、５話完結という事ではございますが、ショートエピソードくらいはタイミングを見計らって書きたいなとは思っていますし、どこかのタイミングで続きの構想が練りあがるかもしれませんので、それはまたの機会に。

となると、キャラクターについてとは言いますが、ここからは続きというかこの後の話を今ある段階で話していく事にします。

セイバーもとい、「アルトリウス」はこれからギルドメンバー集めに奔走します。とはいえ、一人でというわけではなく、１層の１件で宿屋に一緒に泊まるほど仲良くなったアスナも一緒です。

ギルド名だけ言うと、《ブラック・ラウンズ》で、正式名称『Ｋｎｉｇｈｔｓ　ｏｆ　Ｂｌａｃｋ　Ｒｏｕｎｄｓ』です。「ＢＲ」や「黒円卓」という通称で呼ばれます。少数精鋭のギルドになると思います。

この他にＳＡＯ原作にいないキャラとして出そうとしていたキャラは、原作名でＳＡＯからはユウキ、ＦａｔｅではＳＮ、ＨＡからギルガメッシュ（子ギル）、メディア、佐々木小次郎、Ａｐｏからモードレッドという感じでした。ちなみにモードレッドはアルトリアの双子の妹、という設定です。

他に出そうとして宙ぶらりんになっているのはヘラクレス。元がバーサーカーなので完全にオリキャラ化になってしまうのがあまり嫌なのですが、アニメのヘラクレスの動きを見ていたら書きたい気もしています。まあ、これは本当に妄想の妄想みたいな話ですがね。

アーチャー陣はギルを除いて全滅ですかね。ギルはＣＣＣで斧を使っていたので滑り込みセーフ。英霊エミヤは二刀流というキリトのお株を奪うような戦い方と弓ですし。まあ、ゲームには『射撃』な

るユニークスキルがあるそうなのですが、ゲームはやってないですし、ＡＬＯ編まで続いたとして、新章で颯爽と登場の方がらしい気もします。

以上が妄想でした。

全く持って、誰得と聞かれれば自分得でしかない後書きではございましたが、ここまでお付き合い頂き、誠にありがとうございました。

最後に余談ですが、手鏡を使う前の男性アバターはＰｒｏｔｙｐｅセイバーです。もしくはガウェインに似た何かです。そう思って頂いた方がビジュアルが思い浮かべやすいのではないでしょうか。

さて語りたい事も結構語れたのかな、とも思うのでこれで占めさせて頂ければと思います。この物語はここで一応の完結という事にはなりますが、文章能力がないので構想を垂れ流しにしているだけの作品であれば、また別の作品で会う機会もあるでしょう。その時がございましたら、また読んでいただければなと思います。

誰か文章能力ある方が自分の構想を形にしてくれないかなという無いもの強請りもございますが、また何かショートエピソードや億が一の確率で続きの構想が練りあがる事があれば、またこのページでお会いしましょう。

それでは。

幕間1「決戦前夜」

――それはとある宿屋の出来事。

第一層攻略の前夜、親睦会で仲良くなったアルトリウスとアスナは同じ部屋に泊まる事になった。女子同士、積もる話もあるのだろう。

アルトリウスは纏めていた髪を下ろし、Tシャツにスウェットというラフな格好になっていた。

「え、アルトリウスさんってイギリスの人だったんですか？」

「ええ。なので、この髪と瞳は染色アイテムのものではなく、天然のものですね」

アスナは持っていたアイテムの櫛でアルトリウスの髪を梳きながら、まじまじと見つめる。確かに日本人らしからぬ西洋人形のような顔立ちだったから金髪が自然とマッチしていた。

日本人からすれば、このような金髪が似合うのだから羨ましい限りである。

「じゃあ、言葉とかも言語モジュールで変換されているだけで感覚的には英語で話しているんですか？」

「いえ。日本で3年ほどホームステイしていたので日本語で話していますよ。日本という地はいいですね。土地柄でしょうか。開放感があって、馴染みやすい」

本来、ネットゲームではこのようなリアル情報を流布するのは厳禁なのだが、そうは言っても2人はこの手のゲームは初心者である。あまり気にせずに現実世界の話などで目下盛り上がっている。

勿論2人とも、人の個人情報を流布するような軽口ではないので問題はないが。

「イギリスは一度旅行に行った事がありますけど、街並みが綺麗でよかったと思いますけど」

「確かに建造物の造形は文化の違いですからね。私としても祖国の街並みは好ましい。アインクラッドのような昔の西洋の街並みも中々に私好みだ。だが、日本の昔ながらの建造物、武家屋敷などもいいですね。宮殿や西洋の屋敷と違い、来る者拒まずな、あの雰囲気は素晴

らしいと思います」
「建造物とか文化とかが好きなんですね」
「物というより文化、ですかね。物に伝わってきた歴史が好きなんですよ」
　アルトリウスは歴史が好きである。元々剣術漬けで趣味などはなかったが、昔から絵本の代わりに読み聞かせてもらっていたのが『アーサー王伝説』だったというのも関係しているのかもしれない。日本に来て趣味に目を向けられるようになってからは様々な神話や歴史書、伝記を読み漁っていた。また、建造物にも興味があり、居候で借りている部屋には西洋建築の雑誌や世界遺産の雑誌が棚に並んでいる。
　自分のＳＡＯでの名前「アルトリウス」の由来も一緒に語ると、アスナは「なるほど」と納得する。
「ずっと思ってたんです。『アルトリウス』って男性名ですよね？　なんで男の名前を使っているのかなーって」
「……実はキャラ作成時、というかはじまりの街でこの姿に戻るまで男性アバターだったんですよ。名前は変えられないので。本当の名前は、『アルトリア』と言うんです」
「そ、そんな簡単に本名を言わないでください！」
　さすがのアスナもそれには怒る。
　だが、アルトリウスはそれに驚き、「そうでした」とあまり気にしていない様子で、軽く言う。
「ですが、アスナならば構いません。貴女はそれを知ったからと言って、流布したり悪用したりするような人間ではありません。それは会って間もない私でも分かる。口がつい滑ってしまいましたが、それが貴女で幸運でした」
　その言い方はずるい、とアスナは思う。そんな事を臆面もせずに言ってのけられれば、する気もないが、したくても出来ないだろう。
　アスナは嘆息する。
「じゃあ、アンフェアなので言いますけど。私の名前はキャラネームじゃないんです」

「そうなのですか？　ネットでは本名を隠すものと聞きましたが」
「アルトリウスさんが言わないでください。……正直、ネットの事とかあまり考えずに決めたんですよ。これで対等なので、この話は終わりですっ」
　一方的に打ち切られ、そういえば何の話をしていたのかと反芻する。そして「ああ、日本の良さでしたね」と、随分と脱線した事を思い返す。
「そうですね……日本で言えば、ご飯ですね。何より日本はご飯がどこも美味しい」
　個人店として雑多とある飲食店は、どこもクオリティが高い。それぞれ独自の味付けや工夫があり、食べ歩きをしても飽きないというのはそれだけで素晴らしい事だ、とアルトリウスは語った。暇と金さえあれば基本的に、図書館かご飯を食べているかの2択だという。
　さすがのアスナも苦笑し、
「そんなに食べて太らないんですか？」
「そうですね。代謝はいいようです。後、剣を捨てたわけではなく、今も振り続けているので食べた分は体を動かすようにしているのであまり体重で困った事はありませんね」
「……」
　アルトリウスとしては事実を語っているだけなのだろうし、悪気はないのだろうが、一女子として日々気にしている部分を一切気にしないと言う目の前の少女には嫉妬心を覚えずにはいられない。
「あ、アスナ？」
　ふーん、と表情が暗くなってしまったアスナを見て、アルトリウスは何か失言をしてしまったのかと慌てる。昔から同性とこの手の話をした時に、同じような微妙な空気があった。とはいえ相手にもプライドがある。そうなった理由など、誰も話さないのでアルトリウスも何が気に障るのだろうと、自分の悪い所が見つけられずにいる。
　わたわたとする目の前の少女を見て、大人びているがやはり年相応の少女なのだと実感し、悪戯心が擽られる。
「本当に気にした事ないんですか……。じゃあ、ちょっと触って確か

めてみますね！」
「触って、って――ちょっと、アスナ！」
アスナは梳いていた手を止めて、アルトリウスを羽交い絞めにする。そして脇腹や背中などを触り始める。こそばゆくて暴れるアルトリウスを尻目に、アスナは「おお、本当だ」と感心する。女性アスリートのように筋肉隆々というわけではないが、着痩せするタイプのようで触っていて鍛え抜かれた腹筋など硬くて羨ましい限りである。
「や、やめっ……うっ、あ、アスナ……」
色っぽい声を出され、アスナは頬が赤くなってくるのを感じる。
2人はあくまで女同士だアスナにそんな気はない、……はずである。
と、木彫り風の宿屋の扉が叩かれる。
「おーい。ちょっと明日の事で――――」
「あっ――駄目、アスナ……ッ」
あ、とアスナが手を止める。
何かを言いかけていた扉の前のキリトも黙り込んでいた。
「……ごゆっくりー」
キリトは機械的なその一言だけ残し、扉の前から気配を消した。
部屋が静まり返った。
「勘違いされちゃいましたかね？」
「もうっ！　アスナのせいですよ！」
やっと解放されたアルトリウスは、涙目でアスナを睨みつける。
アスナは「あはは……」と乾いた笑いを見せるが、アルトリウスはそっぽを向いてしまった。
「本当にごめんなさい！」
立ち上がり、謝るアスナ。
それを横目で見たアルトリウスは、「はあ……」とため息をつく。
「いいでしょう。ただし、あそこまで弄ばれたのです。キリトにも弁解しなくてはいけません。許すには条件があります」
さっきの話から何か食材アイテムや食料品の提供、かなと割と失礼な事を思うアスナに、先ほどとは打って変わった真剣な声でアルトリ

ウスは言う。
「このボス攻略が終わったら、アスナも私達と一緒に来ませんか？」
「――え？」
唐突な申し出にアスナは固まる。それは要求などではなく、お願いだった。
躊躇するアスナに、言葉を続ける。
「パーティーを暫定のものではなく、終わった後も一緒にパーティーを組みませんか？　私はアスナとの関係をこの日限りのものにはしたくない」
嬉しい申し出だとは思う。
ＭＭＯＲＰＧにおいて、いやデスゲームであるＳＡＯだからこそソロで戦い続けるという事は、本来避けるべき事だ。何か急なアクシデントや強い敵に直面した時に、一人だけでは対処出来ない事が多過ぎる。
だが、アスナは首を振る。
「……慣れ合いをするために、私はここに来たわけじゃありません。私ははじまりの街で腐っているぐらいなら戦って、自分のまま死んだ方がいいと思ってここに来ました。だから、私は一人で戦って一人で死にたい」
このデスゲームをクリア出来ないと思っていたのは何も、はじまりの街に留まっていた者だけではない。ここに居るアスナもその一人なのだ。どうせ死ぬのなら何もせずに惰性で生きていくよりは自分であり続けて死んだ方がマシだと思っている。
「人が一人死ぬ事はあり得ません」
アルトリウスは先ほど悪戯で抱きつかれたように、そっとアスナを正面から抱きしめた。
「人が死ぬ時、その人だけが死ぬのではありません。既に私の中に、今夜共に語らったアスナがいます。貴女が死ねば私の中のアスナも死ぬんです」
その優しげな声にアスナは目を閉じ、黙ってその言葉一つ一つを胸に落とし込んでいく。

「アスナは既に私の仲間です。例え、パーティーにならなくても、貴女がどこに居たとしても私が貴女を死なせはしません」
そんな無茶な事、とは思えない。その言葉にはそんな力強さがあった。
まるで人を導く王のようだと、何となくそう思った。
「――賭けをしましょう」
「賭け？」
「ディアベルは言いました。この戦いははじまりの街で燻る皆に希望を与える戦いでもあると。明日、私達がボスに勝てた時、貴女の胸にも希望が宿るはずです。だから、これは賭けです。もし明日の戦い、勝つ事が出来れば、アスナはパーティーの一員です」
賭けに負けた時、それはアスナだけではない。アルトリウスやキリト、攻略を夢見るすべての者の希望が闇の中に消える。はじまりの街のいるプレイヤーだけではない、この戦いに間に合わなかった全てのプレイヤーは攻略を諦め、寿命の時まで、この地で生きる事を選択するだろう。
アスナは少女の胸の中で、黙ったまま小さく頷く。
アルトリウスはそれを感じて、まるで赤ん坊をあやすようにアスナの背中をポンポンと叩く。
「契約は成立しました。私達は絶対勝ちます。だから安心して今夜は感情のまま泣いて、眠るといい。幸い、ここでは睡眠時間に縛られる事はない。明日の事は気にせずに、今はただ、自分のためだけに」
それがアスナのその一日の最後の記憶だった。後は何も覚えていない。ただ、子供の用に泣きじゃくる自分と、それを優しく包むアルトリウス。その温もりだけは、目が覚めても身体と心に残っている、そんな錯覚を覚えた。
これは幕間の一つ。
人と人との温もりに、心を救われた、そんな少女達の雪解けの物語である。

幕間2「ＳＡＯ／Ｂｌａｃｋ　Ｒｏｕｎｄｓ　―ＺＥＲＯ―」

これは剣の乙女と黒の剣士が出会うより前の話。
幕間以前の、何も始まっていない、そんな日常の一幕の話である。

＊＊＊

「《ソードアート・オンライン》とは何ですか。シロウ」
聞き馴染みのない単語に首を傾げる。
「ああ」と答える青年。白髪に浅黒の肌。鍛え抜かれた精悍な体格も相まって東洋の外人にも見えるが、実際は純日本人である。そんな風体のシロウと呼ばれた少年――衛宮士郎は米を運んでいた箸を止め、頷く。
「ネットゲームの名前だ。慎二から誘われてな。２５歳になってまでゲームなんてどうかと思ったんだが、βテストと言うんだったか。試運転の段階で出来がよかったらしく、暫く日本に滞在するなら一緒にどうだと強く言われてな」
「なるほど。しかし、誘われたのはシロウでは？」
「そうだな。だが、初期生産分の抽選に外れたらしく結局話は一旦終わりになったんだが、一緒に応募していたオレの方が当たってしまってな」
「普段はこういう抽選系は滅法当たらないのだがな」と憮然そうに語る。そういえば先日町内会の福引でティッシュが当たって残念そうだったのを思い出した。確かにこの士郎という青年は運がいい方とは言えない。
「慎二に譲ると言ったんだが、逆に怒られた。プライドが許さなかったらしい」
嘆息しながら「相変わらず困ったヤツだ」と口ごちる
シンジと呼ばれた青年は金髪の少女――アルトリアも知っている。
２年ほど前からシロウの家にホームステイをしているが、言葉を交わ

した事は正直少なくはない。アルトリアの目からも自尊心の塊のような青年だったという印象だ。猫型ロボットが出てくる某国民的ジャパニーズコミックで見た子供が成長して漫画から出てきたような青年だ。本人からするとヘタレな眼鏡の主人公ポジションの士郎に施しを掛けられるのが嫌だったのだろうと容易く想像できる。
「話は分かりました。しかし分からないのは、それでなぜ私にそのような貴重なゲームを」
「ゲームに興味のないオレだけやっても慎二に悪いしな。かと言って貴重なゲームだ。売るのも勿体ない。それにこういうの、アルトリアが好きだと思ってな」
　ソフトのパッケージを指さし、アルトリアに差し出す。そこに書いてあったのはありふれたキャッチフレーズだ。『剣一本でどこまでも行ける』。あまりゲームに詳しくない私でも捻りのない謳い文句だと思う。だが、自然と、そのフレーズから目が逸らせない。
　それに満足したのかシロウはお構いなしに話を続ける。
「しかもこのゲームは普通のＴＶゲームと違う所があってな。ＴＶゲームと違ってコントローラーでプレイヤーを操作するゲームじゃない」
　と言って、足元に置かれていた紙袋から大きな箱を取り出す。几帳面な彼の性格が滲み出るような丁寧な手つきで開けられたその箱の中から出てきたのは見慣れないヘルメット状の機械だった。
「これを被って脳に電気信号を送る事によって恰も自分が物語の人間のような疑似体験が出来る。つまりは剣を振るおうと思えば自然と手が動き、何かを言おうとすれば口が自然と開く。まるでそのプレイヤーに自分が乗り移ったようにゲームが出来るというわけだ」
　その言葉に自然と情景が浮かぶ。どこまでも広がる草原と、そこに剣を携えて立つ自分の姿。かつて祖父の厳しい鍛錬で培われた剣の凡てがモンスターという手加減の必要のない相手に振るわれる。それはとても幻想的で、とても魅力的だった。
「折角青春を費やして鍛え上げた剣術だ。大会などには興味のないのは知っているが、日の目を見ないのもそれはそれで勿体ない。遊びだ

からこそ本気になれるものもある。どうだ。興味があるならネットゲームについても教えるが……。フッ」
最後に言いかけて小馬鹿にしたような皮肉っぽい含み笑いが聞こえて、アルトリアは思わず顔を上げて目の前の青年を睨む。
「何が可笑しいのですか」
憮然と返したつもりだったが、彼にはそれも愉快だったようで隠す気のない皮肉っぽい笑いを止めようとしない。
「いや、何。その顔を見れば返事を聞くまでもないと思ってね」
言い返したくなってムッと返そうと思ったが、彼に舌戦で勝てた試しがない。同年代ならばいざ知らず、まだ中学生の自分と違って彼は歴とした社会人だ。経験値も含めた貫禄でこちらの言葉をすぐに受け流される。
負けを悟ったアルトリアは嘆息して「少しだけです」と負け惜しみ気味に返した。最後のプライドというヤツである。
「分かったよ。とはいえ先刻も言った通り、オレもネットゲームには詳しくない。オレが教えるのは真面目な話。ネットでのマナー、所謂『ネチケット』だ」
インターネット内のエチケットを略して「ネチケット」と言う。SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）は今や社会では連絡手段で使われたり人と触れ合う場として使われたり現実とインターネットの境界線が曖昧になりつつある。顔が見えないからこそのマナーもあれば、それとは別にネットリテラシー――インターネットを理解し正しく運用できる能力も必要となる。
「今の情報社会、自分の発信した情報がどのような形で、且つどれ程の範囲で広がるかなんて分かったものじゃない。だからこそ個人情報だったり大事な情報だったりを明かす事はメリットの数百倍のデメリットを生む。それを踏まえれば自分の現実の情報は極力秘するべきだろう」
「人の口には戸が立てられない、ですか」
「そうだ。それを理解する事で初めてネット社会では一人前だ。インターネットは上手く使えば多大な情報を得られたり、顔も知らぬ人と

つながる事が出来たりメリットも大きい。それを理解しているのとしていないのでは天と地の差だ」
　気軽に利用できるものだからこそ気を付けなければいけない事があると青年は語る。
「という事はこちらも相手の現実の情報は極力得ようとしない方が良いわけですね」
「そうだ。だが、それは現実でも同じ事だろう。留意しなくてはならないのは現実の顔が見えない事によりその当たり前が出来なくなるケースがある事だ。人との関係に恐れ過ぎれば人と深くは繋がれないし、踏み込み過ぎれば相手の心が離れてしまう。ネットでもそれを意識する必要はあるだろうな」
　なるほど、とアルトリアは納得する。
「それを理解すれば後は個人の趣味だ。そのままのアルトリアでもいいし、偽りの自分を演じてもいい。楽しみ方は人それぞれだ」
「偽りの自分ですか。あまりピンとは来ないですね」
「そうでもない。仮想の人格をロールプレイをする者もいれば性別を偽る者も居る。それぞれの都合があり、嗜好がある。現実ではないからこその楽しみ方という事だ。例えばこのパッケージの世界観だからこそ西洋騎士になり切って男性としてプレイしても面白いんじゃないか？」
　確かにアーサー王伝説のファンであるアルトリアとしても女騎士よりも男性の騎士の方が想像しやすい。自分がアーサー王になったと仮定して西洋騎士ならではの立ち振る舞いをして、西洋騎士ごっこをするのも楽しいかもしれない。
　そこは要検討としておこう。
「ありがとうございます。実際インターネットも利用しますが、改めてネットで人と繋がるという事への認識を新たに出来ました」
「大した事じゃない。それでも人ともっと仲良くなりたいと思うなら信用出来る人間を探す事だ。ネットな分難しいとは思うが、ネットがなければ知り合えなかったであろう者との繋がりは得難い。それはイギリスから渡ってきたお前には釈迦に説法というものだろうが」

アルトリアは頷く。実際イギリスで祖父と修行をしていた頃は本当に狭い世界だったが、国も文化も違うこの日本という地で得た士郎を始めとした衛宮家の方々。士郎の友人達。彼らに知り合えたのはアルトリアにとっても最高の幸運だったと言わざるを得ない。

だからこそネットという厳しい中でこそ、もし縁が繋がり、信頼出来る者と共に戦場を駆けられるのであればと夢想し、未だ見ぬ世界に思いを馳せる。

「分かりました。私、このゲームやってみたいと思います。本当にお借りしても良いでしょうか」

「借りじゃなくそれは既にアルトリアの物だ。お返しと言っては何だがプレイした感想なんかを教えてもらえると助かる。慎二とも本稼働が始まればプレイしてみたいからな」

笑い会う二人。日常の食卓。

だが、結局彼のその言葉にアルトリアは感想を返す事も出来ず、逆に青年は絶望する。自分の薦めたゲームに隠された真実に。

《ソードアート・オンライン》。初のフルダイブマシンを用いた大規模なＶＲＭＭＯＲＰＧ。少女はこの話の数日後、そのゲームの虜囚となる。

先に語った通り、これは幕間以前の物語。

――始まりに至るＺＥＲＯの物語。

幕間3「ｉｆ／最古の神話へ」（没ネタ）

――パチパチ。

この状況にあり得ざる、手を打ち付ける乾いた音がフロアに響く。それもその筈。この場で動けるのはキリトと、システムを超えてきたアルトだけ。他のプレイヤーは未だ麻痺のデバフを抜け出してはいない。

「――『システム』を超えた想いの力。見せてもらったよ」

その悦びに満ちた声は、この場に居る一線級のプレイヤーであれば聞いたことのない者はいない。子供特有の声変わりをまだしてないであろうソプラノボイス。その声とは裏腹に経験値を得た大人のような自信を感じさせるその声を。

「正直、カヤバから聞いた時は半信半疑だった。そういう力を持った者がいるのは識っているけど、無駄が多い現実世界でそんな稀有な人間がいるなんて思いもしなかった。思い込みや想像を超えた瞬間に立ち会えるなんて、本当に僕は運がいい」

声の主は暗闇から、ふわりと魔法のないＳＡＯの物理法則を無視した挙動でフロアに降り立った。――闇の中で尚煌めく金髪と、血のような紅い眼、小柄な体格で今に風吹き飛ばされそうな、そんな印象の少年だ。

「ギル……。なぜここに――」

アルトは驚愕に声を漏らす。いや、アルトだけではない。この場に居る全プレイヤーがその姿に動揺した。

プレイヤーをその財力を以て幾度となく陰で押し上げてきた少年――キャラネームは『Ｇｉｌｌ〈ギル〉』。出所不明の財を以て攻略組のプレイヤー達を援助し、ここまで導いたアインクラッド攻略の陰の立役者だ。彼は有力ギルドの立ち上げや攻略組の装備の資金援助を世界の解放を対価に、無償の投資をプレイヤー達に行っていた。故にボスの攻略会議で偶に参加した時の発言権はヒースクリフと並ぶ程だ。

だが、プレイヤーとしての技量は未知数。レアアイテムの収集に付

き合わされたプレイヤーも数多いが、誰一人彼自身が本気で戦っている姿を見た事はない。煌びやかな斧を用いた自衛行為ならば難なく熟せる様だが、戦闘の大半は前衛プレイヤーに任せきりだった。
　だからこそこのボス部屋にこの少年が居ること自体が異質だ。彼のような中級プレイヤーが立ち入っていい場所ではない。プレイヤー達は驚きながら彼を見上げている。
「僕がここに居るのが不思議で仕方ないという顔だね。周りのみんなも同じ面持ちだ。――だけど、一人だけ違う面持ちの者が居るね」
　紅の双眸が一人の少年を捉える。
「……」
「キリト……？」
　キリトの目には驚愕はない。ただ冷静に警戒をしながらギルを睨み据えていた。
「……疑念はあった。ギルの財源はレアドロップを売却する事で得ていたと聞いていた。だが、それが複数のギルドをパトロン出来る程のドロップ率。公平性を貫くこのＳＡＯで運が良すぎると思っていたし、異常だとずっと思っていた」
　そう。それはＳＡＯを一つのゲームとしての視点を持ち続けたキリトだから辿り着けた疑念。ヒースクリフの挙動から萱場晶彦だと見破った、あり得ない推理は、ゲーマーだからこその慧眼だった。
「はっはっはっは！　やはりお兄さんは面白いね。お兄さんはいつでも、この世界が現実の命がけの戦いだという認識がありながら一つのゲームとしても楽しみ尽くそうとしていた。矛盾を内包しているからこそ僕を信じ切れなかったわけだ」
「……つまり、お前も《そっち側》というわけか」
「当たらずとも遠からずといった所かな。厳密に僕とカヤバは同じ存在でも同じ目的があったわけでもない。ただ利害が一致しただけだ」
　ギルはプレイヤーからの悪意や殺意をどこ吹く風で受け流しながら飄々とプレイヤー達を一瞥している。
「僕はカヤバのようにＧＭじゃない。むしろ彼が操るシステムの一部と言えるかな。勿論人間ごときに操れるものではないけどね」

「前置きはいい。お前は何者なんだ」
キリトの問いに、せっかちだねと首をすくめる。
「僕は意志を持ったＮＰＣ。所謂ＡＩといっても差し支えないだろうね」
「ＮＰＣ、だと!?」
全プレイヤーは驚愕する。ＮＰＣという存在はもっと無機質なものだ。無論今までプレイヤー達はＮＰＣと呼ばれる存在に関わり合いがない者などいない。だが、感覚ではあるが、人間とＮＰＣの違い位は見分けが付いていた。だが、あれは違う。あんな感情豊かで欲に満ちてＨＰゲージがあるＮＰＣなど、只の人間だ。
ギルはプレイヤー達の驚きを満足げに眺める。
「君達が驚くのも当然だ。何故なら僕は通常のＮＰＣとは違う。人間が作り出したＮＰＣには魂がない。人形と同じだよ。ゼロから創造されたものは何を掛けてもゼロだ。対して僕は元から１つの人格として在った。カヤバに創造されたものではなく、ここと違うネットワークに魂を持ったデータとして在ったのさ。それをアインクラッドの中枢、管理システムであるカーディナル自身によってこの世界にインストールされたわけだ」
あまりの暴挙にこの僕ですら罵倒を控えた程だ、とギルは語る。
「僕は元々、霊子の海に幽閉された存在でね。まあデータと言えばデータの存在だった。本来であればこんな世界に召喚されるはずはなかったんだが、カーディナルが過去の神話や物語を収集する過程で僕に行きついてしまったというわけだね」
カーディナルには神話や物語を収集し、人の手を介さずに無限にクエストを創造し続ける機能がある。それを無差別に行った結果、この世界とは違うどこかの平行世界の天体ネットワークに繋がってしまったのだ。その結果、元々の存在から分離して幼年期の彼を基にした疑似ＡＩとして呼び出された。それが彼という存在だった。
「無理に理解する必要はないさ。僕は既に形を成した《現象》だ。理解した所でどうなるわけでもない。そういうもの、だと思ってくれればそれでいい」

キリトも凡てを理解出来たわけではない。正直平行世界の天体ネットワーク等、中二病の妄想だと信じたい。だが、彼の言葉には嘘はない。そう思えた。だからこそ、そんな理解できない事よりも問い質したい事があった。
「……お前はさっき自身の目的とカヤバの目的が一致したと言った。お前の目的はなんだ」
その質問に「話が速くて助かる」とギルは笑顔で答える。
「簡潔に言うとね、僕の目的は2つだ。君達人間の成長と、必要なものと不必要なものの選り分けだ」
「選り分け……？」
「ここに呼び出された事自体は正直迷惑な話だったよ。とはいぇ、データの世界とは言え召喚された僕としてもこの世界は都合がよかった。無駄な人間で溢れた今の世から不必要なものを間引きたかったからね」
「間引く、だと。ふざけるな――ッ！　貴方は何様のつもりなのですか！」
激高するアルトに、嘲笑で返しながらギルは当たり前のように返す。
「何様って、僕は王様だよ。人を間引くのは神じゃなくても人間で十分出来る仕事さ。だけど人間には共通の価値基準がない。だからこそ王である僕がその仕事を担う必要がある。そういう意味ではこのアインクラッドは僕がするべき仕事を任せるにはお誂え向きな世界と言えるだろう。弱き者は淘汰され、強き者が生き残る。まさに原初の世界さ」
あまりの暴論に一同が怒りを忘れて言葉を失う。目の前の少年は何もふざけていない。悪びれもしていない。先程から荒唐無稽な話をする時も、傍若無人な論理を話す時も彼の言葉には偽りがない。真実に正しいと思っての言葉だった。
「……狂ってる」
「狂ってなんていないよ。僕が狂う事なんてあり得ない。例え原初の悪、《この世全ての悪》を呑み込んだとしてもね」

彼は無邪気に笑う。天使のような顔立ちだが、その実、人間にとっては悪魔のようであった。
「本当はここまで見られれば大人しく消えるつもりだったんだけど、ごめんね。気が変わった。この世界の核心に辿り着いた君達に興味を持った。だからこそこの世界をこのまま終わらせるのは惜しい」
これでゲームクリアにはさせないと少年は言う。それは少年の最後までこの世界を、自分達人間を見定めたいという我儘だ。
「僕は、カヤバに代わって君達に相対しよう。アインクラッド最上層、紅玉宮の間でね」
プレイヤー達に動揺と恐怖が襲う。
ギルは踵を返す。彼の向かう先には黄金の扉が創造され、鈍重な音と共に扉が開く。
「させるか――ッ！　こんなふざけたゲームはここで終わりだ！」
「――《天の鎖》」
『な――ッ!?』
彼が指を鳴らすと、鎖が暗闇を割いて出現しキリトとアルトを縛り付ける。黄金色の波紋から飛び出したそれはキリトとアルトの四肢を生き物のように絡め取り、完全に動きを封じた。
「《スカルリーパー》に手こずるようじゃ未だ僕と戦うには不足過ぎる。弱い者苛めをして愉しむ趣味はない。それじゃあ意味がない。もっとレベルを上げて、自らの剣を鍛えて、星を集めて僕の袂までおいで」
と、ふいにギルは立ち止まり振り返る。
「おっと。君達にカヤバを倒した報酬と、最後の後押しをしてあげないとね」
ギルがシステムウインドウを出すために左手を振る。
「君達のレベルや戦闘スキルの成長速度を速めた。これで九十九層までの道のりを、カヤバや僕が居なくても登って来られるだろう」
来た時同様、愉し気にギルはパラメーターを操作する。
そして、鎖が出現した時と同様の黄金の波紋から二振りの剣が出現する。

「そしてカヤバを倒した君達、勇者二人にはＬＡボーナス。大奮発だ。受け取るといい」
カラン、と音を立てて、二人の前に銀の刺繍と金の刺繍が対照的な片手剣用の直剣と両手剣用の大剣が放り投げられた。
用が済んだと、ギルは背中を向けて黄金の扉の光の中に歩いていく。
「待て――ッ！」
キリトは動けない身で、目の前の少年を全力で睨みつける。
「ごめんね。赦してね。そして運が悪かったと思って諦めてね。これが君の、君達の――『Ｆａｔｅ〈運命〉』だと思って」
今度こそ立ち止まらず、背中越しに手を振って光の中に消えた。
「――待ってるよ。この世界の果ての果てで」
音を立てて扉が閉まり、フロアに静寂が齎された。
ボスを倒した後のいつもの歓声も喧噪もない。
ただ、ただプレイヤー達は絶望に苛まれながら少年が消えた虚空を呆然と見つめていた。

アインクラッド７５層攻略。それは終わりであり、始まりだった。
プレイヤー達は再びアインクラッド１００層を目指す。
これより始まるのはＳＡＯであってＳＡＯではない。
原初の地獄。神話の戦いだ。
――解放の時は、いまだ遠い。